

た。読みずらいかわりに、真実の姿がよみ取って貰えるのではないかと
思う。

当時三十六歳で、五人の幼い子供等を引きつれて、義姉に恵まれた
僅か五円の金を持って戦火の南部地域を逃げ廻った与那城ツルさん
は、不思議にも十四歳を頭の五人の子供と共に戦火を脱して助か
ったのであるが、北部の食糧難の栄養失調で二児を失い、三人の子
供をつれて捕虜生活の後、自分の部落へ帰ったのであるが、兵隊に
取られた夫はいつまで待っても帰って来ない。幼い三人の子供を抱
えた未亡人生活は、他人のはかり知れない苦しい悲しい長い月日が
あったものと考えられる。この解説を書いていると、その苦難と悲
しみの記録も追加したい気持ちだが、湧き出る。

安谷屋 広 英（四十七歳） 村務主任、防衛隊

沖縄戦の始まる前、若い者は、徴用といって、これは徹底的な義
務であった。それでも若い者では足りないもんだから、補助労務と
いうて、女も男も軍が命令する。これを補助労務といって出来るだ
けの仕事させた。雑役からいろいろの軍の必要な労務はこの補助
労務者がしました。

それから、供出ですが、野菜は芋の葉までも出しました。豚の供
出の例をいいますと、桃原は、四組に分けて、部隊へ供出するよう
にしてみました。人数の少い貧しい家でも組の供出の義務を同じ
く果たさねばなりませんから、高い豚を買って、軍へ供出するの
ですが、軍では公定相場を支払います。豚は大へん高く民間では売買

たらそこで撃たれたら、それだけの馬が倒れたわけです。

それでわたしらも、自分の家族のところへ行って見たんです。そ
うしたら、なーに、家族は全滅しているんです。朝出て行った時は
みんな元気だった家族が、来て見たら一人も残らず全滅してしまっ
ているんです。壕は池田上原といってですね、自分たちのお墓を、
お骨は片づけて、壕に入っていたわけです。

家族は、妻に子供が十六になる三男、十一になる双児の四男と五
男の二人、長男の妻二十一歳、それに孫、それは生れて六か月にな
っておりまして。この六人だったんです。長男は年は二十一歳で現
役でした。次男は防衛隊へ取られていました。その時、わたしは、
村の壕を掘っていたんです。そこはヘンサの底のグチ又という所
です。傷を受けた人だちを収容する壕です。軍の病院もそこにあっ
たんです。そこから少し離れたところにも、壕を掘る準備もしてあ
ったんですよ。

家族が入っていた墓は、わたしたちのお墓ですが、他の人も、大
勢入っていました。石川という先生の家族四人も入っておられま
した。それからわたしの叔父さんの家族たちも、それからわたしの姉
さんの子供二人、下門という家の子供が四人、それから大城コウシ
ユウさんの奥さんですね。

これだけ十七、八名余りの人が入っていたのですが、直撃ですか
ら、全滅でした。中は穴になって滅茶苦茶なっていました。爆弾の
直撃でありますから、遺骨も跡形なくなっているのではないかと思っ
ていたんですが、みんな埋められていて、ちゃんと形が残っていた
んです。終戦後になって、遺骨も拾いました。

されてきました。公定相場は闇相場に較べると、まるでただみだ
な値段でありました。それで供出では、この桃原部落は非常に苦
みしました。

徴用は、病気の時でも、お医者さんの証明を持って来いとい
つて、非常に嚴重なものでありました。

その時の兵隊は、山部隊と思いますが、兵隊は、部落の松並木や
松林を遠慮えしやくもなく伐っていました。人家の床などもはずし
て、薪にもしました。はじめは兵隊は、何もかもやりたいように勝
手に振る舞っておったんですよ。それは、十・十空襲後のことであ
りました。

それから戦争が始ってからのことですが、わたくしは、沖縄の第
一線は西原であったと思うんです。何故かといいますと、西原へ戦
争が来てから、応援の部隊も島尻から来ておるんですよ。それだか
ら馬なんか、何千（？）というくらいいたんですよ。機関銃でバン
バン撃たれたら、何千という馬が逃げ走るのでですよ。後は、声を上
げて逃げ廻るが、後になると全部一か所に鼻をつき合して集まるん
ですよ。機関銃であちこち撃たれた、後は死ぬんです。そうして、
兵隊は壕に引込んでおるんですよ。そこでね、わしらは、ヘンサ
の底に病院壕がありますから、戦時収容所の穴を掘らしてくれない
かといわれて、十四、五人くらい行って、壕を掘らしていたん
です。そうしたら、ヘンサの底の状況はわかるから、隠れる場所、遮
切られている場所があると知っているもんだから、馬をすべて引
張ってそこへ集めたんですよ。弾薬を運んで来た馬も、食糧を積ん
で来た馬も、あちこち島尻からも馬が寄って来たんですよ。そうし

家族が埋められているので、人も集まっていたので、掘ろうとし
たんですよ。ところが、あまり弾が激しくて、止めるほかなかっ
たんですよ。

わたしは家族をみんな失っていきなっていますので、もう一日
だけヘンサの底の壕を掘って、島尻の方へ越えて行きました。命の
ある限りは生きようと思ったんです。それで、島尻に行かないとい
かんと思ひ、墓には小屋もつくってあって、持つものはありまし
た。金なんかもありました。自分の食べるだけ、食べ物もあったの
で持って行きましたよ。島尻に行く時は、何というところでした
か、橋がありました。余り激しくて、橋の下におりました。大里
の仲程に行って一晩過ごして、八重瀬まで三日かかってあちこち弾
の中を逃げ廻って行きました。

八重瀬で徴用（防衛隊）に取られたわけですよ。八重瀬に行っ
たら、若いものからということで、取られたんですが、その時まで
まだあるんですよ、衣服なんかもすべて、かれこれ仕度が。そうし
て後原に行つて、今度は玉城村の前川に移されたんですよ。前川か
らまた東風平後原（具志頭村の後原ではないかと思う、後原はたま
たま東風平村に入っていると間違われる）に移されたんですよ。後
原からは酷いんですよ。激戦だから、壕からみんな出して、大き
な平板ですが、みんな番号つけて、出て行きおったんですよ。壕か
ら何名といつて人数をかぞえて、行った方がいいじゃないかとい
つてですね、出て行つたんですよ。玉城村前川で号令かけて、みんな大
勢やられてしまつてここで転んでしまった人が、みんな死んだん
ですよ。艦砲や機銃ですよ。それから、玉城村前川から、後原に移

ってから人間が大分死んだですよ。あの時の死骸、東風平の富盛からも上ノ木という人が来ておつてですね、非常に強かったですよ。この人は、第一線にも、首里城の戦いにも行って来たんですが、この人が、戦争のために働いた人たちの死骸を道に放っておくことはいけないといつて、富盛の青年たちがみんな運んで壕の前に持って来てあつたんですよ。富盛の人、上ノ木といつて島尻の一本柱と青年たちがいつていたですよ、兵隊の教育している人です。それでわたしは、あつちの青年は真面目だなあ、と思いましたよ。

わたしが怪我したのは、真壁・真栄平の村はずれの壕ですが、人間のようにはなかつたんですよ、わたしは。わたしが一番酷くやられたのは、真壁・真栄平の壕ですよ。軍隊といつしよに行つたもんですから。その壕には、爆雷撃ち込まれてですね、弾も打ち込まれたですよ。わたしはこの顔、捕虜取られて行く時なんか、みんなが知らなかつたですよ。顔は、火焰で全部焼かれておるんですからね、顔全体が白くなつていたんです。こつちがわは、破片が通つて行つたんです。それであつちでは、もう今日までしかおらんからといつてこの壕から、隊長が食べ物も持つて行けといわれたんです。しかしあつちはすべて半搦米ですよ。わたしは現役は上等兵だが取られたのは防衛隊だから、襟に星などはつけません、星もない服があつたんですよ、防衛隊ではあるが兵隊たちといつしよです。そうしてその壕では沢山の人が死んだんですよ。弾も投げ込まれたが、それから黄燐といつて水の中でもどどん燃える黄燐弾があつたんですよ。壕は真栄平の端の、こつちから向かつたら右がわの壕ですよ。右は何といつか聞きませんでした。中には水もありました。炊

この車をいつも見ているんです。子供が生きていかなと思つていつも出て行きましたんですよ。今日も来ない、また今日も来ない、来るたびにいつも来ない。このうち一人でも生きておつたらと、わたしはもう五十にもなつておるんですから、くやしかつたんですよ。もう桃園に来た時には、完全に諦めました。

長男は、百名の病院でいっしよだつたという人が話していたことがありましたが、次男はわかりません。

註、安谷屋さんは、昭和二十年の三月までは、九名の家族が、皆元気に生存していた。長男と次男は兵隊に取られていたが、一家揃つて、日々を無事に送つていたのであつたが、米軍上陸間もなく、一瞬に六人の家族と叔父・叔母なども、米軍の爆撃で失つた。その上、兵隊へ取られた二十一歳の長男と十九歳の次男も遂に帰つては来なかつた。しかも四十七歳になつていられた。屋嘉の米軍收容所での一年余、その後一年間コザ市で過ごされたが、安谷屋さんのように、全家族を失つて、自分一人だけ残つた戸主の男の場合は、死、自殺を考えたり、直撃で死んでいた方がよかつたがと思つたりする例も出ている。定めし、安谷屋さんにも悲痛の極限まで心身が追い詰められた夜が、いくらあつたかしれないとお察しされる。死ぬにも死なれない苦しみというのも幾度幾度度味わわれたことだろう。死に度いと思つても死は生きるのよりこういふ場合難しいことであろう。一家全滅も多いが、安谷屋さんのように、八名の家族全員を失つてただ一人残されるということが最も悲惨ではないかと思われる。

事場もありました。

わたしが入つて行くのと入れ代つて出て行く兵隊もあつたんですよ。民間の人もその後からは入り交じつていきましたが、その壕では兵隊も沢山死にました。

われわれはその壕から出て、散りぢりになつてですね、後の墓場に行つておつたら、そこへ民間人が来たので、そこから下りて行くとうとしたら、アメリカ兵に、手真似で呼ばれて、屋嘉につれられて行つたんですよ。

捕虜になつた日はわかりませんが、ずつと逃げ廻つてばかりだったので、何月の何日になつていたのか、わたしはあの時は、狂人まぢがひみたいになつていましたからね、顔は全部焼けて、真白くなつていたんですよからね。

二十一歳になつていた長男は二十の時に現役に取られました。あの時は、繰上げ検査で十九、二十はほとんど徴兵検査はちよつと形式だけで、みんな現役に取られました。長男も帰つて来ません。どこで戦死したということもわかりません。ただ沖繩戦で亡くなつたということだけで、島尻の方で亡くなつたのではないかとことをちよつと話をきいただけです。

次男も軍へ取られて、やはり帰つて来ません。これも長男と同じことで、どこでどうして戦死したのかわかりません。二人とも、遺骨もわかりませんよ。

長男も次男も、帰つて来ない、戦死しただろうと思ひました。何かといえますとね、わたしはもう自分の子供は、このみんな捕虜なつたものたちをアメリカの車でどしどし連れて来るんですよ。わたしは

喜屋武 久英(四十歳) 現地召集

供出は新体制が出てから、いろいろな供出がありました。わたしは召集から帰つて来て、半年の間は徴用であちこち歩きました。それから区長ということになりまして、毎日教養と教育といつて、朝も晩もやつていましたが、あの時の徴用のやり方は、役所からの命令で、三週間を徴用やつて軍に協力、あと残りは家に帰せと言われおりましたんですよ。しかし実際のところは、まだ徴用から帰つて来ない本人に、また徴用令状が入つて来てからに、令状渡すにも家族に頼んで置いて、またその日になつたら、徴用に行くようにといふこと、明日はあなたの番だから、どこへ行きなさいといふことを、夜にかけても廻つて言うておりますが、たまには二、三日も徴用から帰つて来ない、行つて徴用先から帰さないの、家にいないで、期限を遅らすこともあつたんですよ。

そうしてやつておりましたが、供出は、西原に石部隊、与那原には武部隊がおりまして、両方に供出させられておつたんですよ。その時に、かち合つた場合は、どうせ品物が命令通り沢山はありませんから、両方に分けてやるうといふふうによつたら、軍は大変きびしくて、石部隊の方では、お前らは西原の村だからこつちにやるべきだといふ。また武部隊から来たたら、我謝の上の線から□□の上、福地丘の線へかけて、こつちは武部隊の区域だから武部隊にやるべきだといふ。両方からそんなにしてやつておりました。この供出の主なるものは芋と竹、縄、野菜などが命じられておつたんですよ、あつちも取り、こつちも取るといふふうになつて、こつちで

は、供出というのは名ばかりであって、ほぼ脅迫同様な扱い方をされておりました。

それでもまあ、あるだけしか取らんからというて、後は我慢しておりましたが、役所からは供出を出せという催促が来ますし、供出は出すから脅迫みたようなことはやらんでくれといたりした。取りに来た上等兵が二十四名の徴用者を引率をして来ていました。そうして「お前等は何をいうか、戦さはここ来ているのに、そんなことではたまるか」とう。供出は一度だけはいけない、今一度に全部を取ったら後の供出に困るからといたら、この上等兵がナタを持って来てわたしの鼻を打って、鼻血を出したんです。だが、そうされたからといって恐いことはなかったんです。これではいかんと思つて、また役所へ行つて、供出は出すから脅迫はしないでくれ、手を出すので、相談ではないからとிட்ட。すると村長も、それはいかな、供出はやらぬといかんから、どの部隊はどれだけと割り当てやるようにしよう、しかし脅迫みたようなことをやってはいかん、とிட்ட。

また豚の供出命令が来ました。ところが部落に飼っていない百斤以上の豚をいくら出せということになったので、これは困つたことだなとிட்ட、百斤以上の豚は要求だけおらんから、何とか考えて貰えないかと願つたら、後は九十斤以上ということになって、九十斤あるか無いかという豚を供出しました。

そうして毎日やっておりましたが、戦さが来る前に、まだ上陸はやつてなかつたはずですが、空襲があつた時には、この部落にいく爆弾が落ちたということもよくわかるようにしようということでも、これを引つ張りなさいとிட்ட、また壕からみんな追ひ出されて、またみんな引つ張つて山砲を出しました。出したところがこの部隊は、部落の壕にこの山砲は入れるから、部落民はみんな壕から出るといわれました。その時は、もう九時頃になっていたのでどうと思つています。それで、今は敵の飛行機が飛んでいるから、晩の五時になって、飛行機が飛ばなくなつたらみんな山に連れて行くから、その間は部隊といつしよに壕の中に入れて置いて下さいとわたしは願つたんです。そうしたら、それは絶対はいかんといつて、とうとうみんな自分たちの壕から追ひ出されてしまいました。

それから、仕方ないので、昼、みんな山に入つて、木の陰や山中を歩いて、子供等もつれて、さまよつて歩いたわけです。

自分たちの壕を追い出されて、山へみんな避難するため、田圃のところを通つている時に艦砲が落ちました。それで五つになる三男が、死にはしませんが破片で怪我をしました。

山の中へ行きましただすが、今は池田上原とிட்டいますが、あの時は安室上原とிட்டいました。そこに壕を掘つていましたら、まあ、戦は、幸地の福地丘といふところまで敵軍が来て、自動小銃でバンバンバンバンやつておる。音が小さくなつて、戦さは既に止んだような気がおりました、こつちで。

その時に負傷した防衛隊の一名が、ここへ来た。あつち来て鉄砲を撃つのは敵だ、とிட்டから、水を飲ましてくれといふので、水を飲ましてやりました。そうして、またになった木の枝を切つて、それを杖にして島尻へ逃げて行くといふのですが、その時この防衛隊は、「あつちへ来てゐるのは敵だよ」とிட்டから、杖をつ

したが、第一回の爆弾が部落の前に落ちて、それで二名犠牲者が出ています。あの時には、夜間になって、敵の飛行機が去つてから、役所へ行つて報告することになっていましたが、そうして報告したんですが、あの時は、伝令といひまして、その伝令が行くことでありますが、誰も行くものがない、区長行きなさい、といふことのでわたしが行きました。本道を小波津の前を通つて行くことができないで、山道を通つて行つて、役所に報告をしました。

そうして役所の壕に入つておりましたが、南上原の激戦といつて、あつちの住民の立ち退きのためにとிட்ட、夜の八時頃から中城の人たちがやつて来ましたので、その人たちを案内して、「こつちは墓である」とிட்டって墓場を見せたのですが、八十四の墓を数えた時には夜が明けて朝日が上つていました。そうして中城からの避難民を山に配置して、避難をさせました。

部落の壕は、西方に桃原部落全員が入つて中から通れるくらいの壕を掘つてあつたんです。そうして空襲もその壕に入つていたんです。

そうしたら、山部隊の山砲とிட்ட、夜明けに、南風原から来たといつて、この道を通つて来ていた。今はこんなに立派な道ですがもとは、こつちふうではなくあの丘のところからついでいたが、この道を下りたところは溝が流れて橋になつていたんです。ところが夷いて来た大砲がその橋に突っ込んでしまつたので、それ兵隊の方で部落の者皆出てこれを出しなさいといわれたので、皆出て、これにロープをかけて引くわけですが、出すことができないで、夜が明けました。指揮官の少尉は抜刀してから、日が上つてい

いて行きました。

それを聞くど、わたしは、親も子も孫も捕虜になるということも聞いたこともない。実にみつともないことだから逃げようということになって、まあ、逃げられるところまで逃げて行こうとிட்டから、池田のグシカミ畑の手前、ヒージャー原（山羊原）の山まで、まあ行つたが、親も弱くて負んぶするし、子供等三名、長男は怪我やつているからこれも担いでやる、妹も股を撃たれてこれも負んぶやつて、まあ、三回も四回も同じ道を行つたり来たりして移動することになった。移動といつても、ただ、敵がこつちへ来るからあつちまで行こうといふくらいでした。そうしてそこに避難していようとしたら、また大きな弾が落ちはじめます。それでもまあ壕は安全だから、そこに壕を掘つて置こうとしたら、日本の山砲をこつちに据えつけるから、あなたたちはこつちから、立ち退きなさいと軍曹が来て言いましたから、「はい」とிட்ட、一番真先に妹をつれて行つた。その後は子供等三名と荷物を担いで、それから親爺を負つて行こうといふ時には、集中射撃で、そこには全然出られんといふくらい夜間になってまでも一晩中撃たれた。子供と妹、妻は先きに行つておるが、その一晩はその壕で夜を明かして、そうしてやがて飛行機が出るなあ、といふ時に艦砲が止んだから、親爺を前のグシカミバまで運んで行きましたよ。その間には、道で倒れる戦死者もおりました。また負傷者もおりましたが、わたしはその時までは元気でやつていて、水も不自由をさせないで壕の中におりました。その壕の上に艦砲が落ちて、壕はくずれんが、その罫りが壊れかけて長男と親爺が怪我をしました。長男は、夕食の皿を

持っている時に落ちたから、これが引っくり返ってそれで顔を打って、今も疵が残っています。親爺はまあ足をやられていましたが、もともと歩くことができなかったんですから、もうそこにおってからに、みんながおったら、どこかへ行くのがほんとはだなど思うても、人数は多いし、一べんには移動はできなくて、行ったり来たり、夜通し道を歩くだから、どうにもならないってからに、困っていたわけでした。

そうしたら、山部隊の後備隊が敵が大名に来ておるという情報で、こっち調査に来たといっただけからに、この壕から出よということになりました。そうしたら、今は出られんから待ってくれといいました。そうしたら、待つのは待つが、あなたがたは、どうせ出ることは決めておけ、といっただけからに。そうしたらまあ出るということでもその兵隊は一応帰りましたから、もう来ないだろうと思っただけ、そのままいた。どうせ今さがしても入られる壕はないからと思っただけ、夜になってから壕をさがして歩いた。ところが、こっちに墓があったと思っただけからに、そこは軍の炊事場になっていて、それで、炊事場の見張番にひつつかまえられて、炊事場の中へ入れられました。

何でお前はそこをうろついているか、といいましたので、壕をさがしていると言えましたところ、「お前はスパイだな」といいます。「いいえ、スパイではありません、家族はどこそこにいる、壕から出れといわれたので壕をさがしているのです」といいました。「そんならお前は、こっちのいいい間まで、ここに坐っておれ」といって、その壕に坐らされて、やがて夜が明ける時に、そ

た。午後になっているが雨が降ってからに、道は大変悪くなっています。それで夜になるのを待っていたんですが、艦砲は絶えずやってくる。しかし飛行機は飛んでいませんでした。それで島尻へ行くということで、子供も担いでおるし、妹はまあおんぶしているが、子供三人捨てるより妹捨てた方がいいといっただけからに、話をしてから、あなたはどうか歩かんといかんよ、そうでもないとお前は捨てるほかにはないが、あなたひとりを助けて子供を三名捨てるというのは忍びない、子供三名つれて行って、自分はまたあなたを連れに来るといっても、それはできるかどうかあやしいことであるし、今度は遠くまで行くからといったら妹は、どうしても行くといっただけ、泣いたんですが、もしどうしても行くというなら、何か杖になるのを持ちなさいといっただけ、それから一緒に رفتんです。

親爺が死んだ時には、まあ、ぼうとしていた。しかし実際に自分の親の顔に土を被せる時には、人間として、何とも言われない辛さで、親は死んでからに、穴は掘って、篋を半分は穴に敷いてから、親を妻と二人抱きかかえて、穴に寝かしてから篋の半分を蔽うて、そうして土を被せた時には、他の人にはそんなことはない、われ一人がこんな悲しい目にあうのだろうと思いました。

そうして島尻に行きました。長男は九つでしたが、右の足は骨が折れていて、左の足はまた肉が取られてからに、両足駄目で歩けない。長男の足は、十・十空襲の一週間前に、武部隊の輸送のトラックで怪我して、そうして与那原の軍病院で治療をして、それから民間医者の方にやっただけです。怪我は軍の車でやっただけであ

こから帰っていいと許されて自分の壕に帰りました。そうして帰ったら、親爺は、なぜそんなに遅くなったかという。こういいうことで、スパイと間違われて止められていたといったら、危いことであつたな、といいました。

夜が明けて壕から出たら、前のサクセン道路には、男と女が倒れて、男は担いだまま土手に頭を下なして転んでいる。また女は箆を荷負ったまま倒れているのを見て、親爺がわたしに、あれは戦で人が死んでいるのかという、はい、あれは戦で死んでいるんですといったら、親爺は、これは大変なことになったな、それではわたしもこっちで死なねばいかんなどいわれていました。わたしは、いや、死ぬというのは大変だから、生きておる間は、どこへでも連れて行きますから、いっしょに来られるように、そんなことは言われんようにといっただけ。親爺はまあ、夜通しわたしをつれて歩くよりも、わたし一名でも少くなったら助かる筈だから、わたしはこっちで死ぬのだといっただけです。それから四、五分も経たないうちに、胸がドキドキしてモノモ思ブレナイ(思考力喪失というのが直訳だが、非常に気分が悪い、ということ)で適訳に近くなるか)非常に気分が悪いといっただけから四、五分後にはすぐ亡くなったんです。落撃で体が弱っていたんですが、そっちでそれを見たら心配やって(ショックを受けて)から、すぐ亡くなったんです。

それで弾は大変激しく来るので、壕には人が置いて行った食糧もありましたので、そこに入っておりましたが、また、五日くらい後になって、下士官が来て、部隊が来るからお前等が出るようにといわれたもんだから、それじやここを出なければいかんなどと思

ります。また、それからサクセン道路から大名に出て、富平に行くと、富平の役所から前に出て、兼城(南風原村)の前の川のところに行つた時には、艦砲が落ちてからに、その時には、一応撃っている間は低い所の土堤に隠れて置きなさいといっただけからに、八発は破裂しましたが、一発は破裂しないで鳴らない弾がありました。兼城の部落の入口で、それから弾が落ちてからはすぐには出ないで、しばらくしてから、怪我はないかときいたら、怪我はないとみんながいったので、それから歩きはじめてからに、東風平、あつちは何と

いったかな、伊弉。割り取りのあるところ行ったら、担いでおる天秤棒が折れてからに、さあこれは大変だといっただけからに、また、荷物を取り直して、子供等を引つけて、半分ある天秤棒で担いで、富盛の部落まで行きました。

そこへ行くまでの途中では、飛行機が、夜、電燈みたようなもので照らして、低空で通るんですから、これはどうしてもいかんといっただけ、そっちの畑に伏せて見たりやって夜でもあつち下る時からには、もう、飛行機が夜間飛行して飛んでおりました。そうして、富盛・与那城といっただけ、まあ、どっちの部落がよくわかりません。八重瀬の下の部落でありましたが、そこ行ったら一応、道端に大きな家がありました。その家は瓦葺きでしたが吹き飛ばされてしまいました。その家の片隅に残ったところからに、また、夜明けに、場所をさがして、木の下に小屋があつたから、そこへ行って行って、それからその日はそっちですごして、夜が暮れかかってから八重瀬の山に行きましたが、その時からは、八重瀬行っても思わしい壕はありませんでした。

それで、どこか掘られるところはないかなと思って、一帯は岩でしたが、その岩をずつと下りて行ったところに「クチャ」がありました。これは、岩の下にクチャ（クチャは、主に島尻地方にある土、岩のように固くはないが、掘り安いのに、容易に壊れない、青色泥板岩）があったから塚になりませんかといってからに、その岩の下を掘って、そっちに入って避難やっていますしたが八重瀬の山で、これが約一週間位おりましたかな。大雨が降ったので、岩とクチャの間から水がドンドン出てからに、掘ってある塚は溜置みたくなって、前は爆風返しといって土を盛り上げてあるから、人はおられないようになって、まあこれはいかんからということ、岩がただ突き出たところで、雨宿りをしておりました。この雨は一日降りそうなので、これではいけないなといって、上の人に、どうぞ、あなたがたのところへ入れてくれんかといったら、入れることはできませんが、こっちにニクブクがあるから、岩の下でこれを被っておりなさいということですから、ニクブクを被っておったんです。

それでもいかんといって、また大屯というところには家が残っておりましたから、あっちの家に行こうといつて、そっちも行って見たら人がいっぱい入れるところがない。茅葺のアマダイ（雨垂れだが、普通に壁や縁がわと、雨垂れの間、即ち軒下のこと）というところにひつついて、雨をよけておりました。それからまた、与座・仲座の山の中へ行こうと話したが、あっちの山の中は軍がいるから弾が激しいそうだよ、ということ、そうかなといつて、摩文仁の部落の牛小屋へ行ったら、弾の音もないしまた飛行機も朝はそこを通過して行くが、また午後の五時頃になったら飛行機は帰って行

ましたが、そうしたら水を汲んで帰るところを機関銃でドンドン撃たれた。水汲みに行くのを戦はそんなに恐いものであるのかな、と思つた。それでその道中に怪我人が出るくらいになっておりましたので、もう行かないようにしようといつたんです。しかし水は飲まねばいかん。あつちは水が非常に少いところ。やはり水汲みにいかんといかんと思つている間に、庭の池の方に艦砲が落ちたもんですからその破片でもって、いっしょに坐っておる人一名はすぐこち打たれてこれに出ておりましたが、目もつぶらないで死におつたんです。

ああ、これは大変だといつて、それから山へ上って行って、山の中におる時に、水は、製糖小屋の池から汲んで飲んでおりました。その池の水はおたまじやくしがある溜り水でしたが、ところが、この池の中には兵隊が二名撃たれて死んでいたので、それでもその水を汲んで飲んでおつたんです。カニ川に水汲みに行くと撃たれてみんな死ぬので、それで池から土瓶に汲んで来た。芋は掘って来たのは、朝早く夜の露に濡れている草にこすって泥土を落して少しの水で煮て食べていたんですが、子供にも昼は寝なさいよ、飛行機が通るから山の中でも人が見えたら弾が来るからといつて、芋も煮て鍋に入れたまま、子供等は寝させて、昼は出ないようにしておつたんですが、その芋は、兵隊が見たもんだから、かっぱらって行ってしまったんです。

それで鍋はあるが、芋はないといつて、次男はまだ七つにしかなくていいませんがね。目を覚まして、芋を食べようとしたら芋がないので、「大人はガチマヤーだ、子供たちは、飛行機が通るか

く、「ほう、ここに来たら戦さのようにはないな」といった。こちに来てからは、芋も野菜も他人のものを取って食べて、この馬小屋の跡におりました、いいところでした。まあこんなところなら飛行機も朝見たら晩に見るだけだからといっていましたが、球部隊本部が摩文仁に移動したということになってから、何と、夜も昼も出られんというくらい、弾も来るし、飛行機も通る。夜だけは歩かれるだろうかと思うくらいでした。

前の摩文仁岳の方には師範学校の生徒が来ておるといふことを聞いたから、自分の従兄弟の子供もこちに来ておるといふかと思つて、夕暮れにちよつと訪ねて見よう、どこに居るのかなといつて行ったら、その時はすでに警戒兵を山の中に配置して、ひっ掴まえられる、「あなたは何をしているか」と訊問されたので、「師範学校の生徒が来ておるといふので自分の従兄弟の子だから、あいたいと思つて来た、何もしてはおらん」といふたら、「師範学校の生徒はこんなところにはおらんよ、お前はスパイだな」といふんです。それでわたしは、「スパイではないんです、家族もあつちの馬小屋におるんです」といふたら、「そんなら誰かいっしょに行つて見て来る」といふていきましたから、「はい、本当におる、それでは、いっしょに帰って行つて見せよう」といふて、馬小屋のうしろに子供等もみんな坐っているのをたしかめてから、帰る時に、あつちが軍が警戒線を張っておるから、あつちに入ったら、暗くなれば撃つよりほかはない、絶対あつちには来ないよといわれたもんだから、そういうことなら行きませんといつてやりました。

それから摩文仁のカニ川というところから水を汲んで飲んでおり

ら眠っていないさいといつて眠らして、芋は全部大人が食べてしまつて、わたしはこんなにもじいのに何を食べるか」といふたんです。それでわたしは、「そうではないよ、芋は兵隊が持って行つてしまつて無くなつてゐるんだ、また、掘つて来て煮てやるよ」といふてなだめたんです。七つにしかありませんから、なかなかきいてくれなくて、その一日は、早く日が暮れたら、芋を取つて来て煮てくれるがなあ、ということだけ思つたんですが、芋がないもんだから、非常に困りました。

註、ガチマヤーは、直訳すると餓鬼猫だが、ほんとの意味はいじ汚い食いしんぼうである。

このように毎日芋を取つて食う、また水を汲む、水汲みに行くところは、非常に弾が来るのでくるしいところです。その水汲みに行く時でしたが、兵隊のところ、松の木を背中に抱いて縛られている人がおりました。なぜあの人は、縛られているかなあ、と水汲みが出る時に訊いたら、兵隊が言うのに、スパイであるといつてからに、捕えて来ているという話だよ、という話を聞いたんです。

それから池から水を汲んでわたしが帰る時に、縛っている縄を解き始めておりました。わたしは早く山に入らないと危いといつて、水を担いだまま山に来て、呼吸を緩めようとする時に、縛られている人は歩いていたので、なぜゆるすのかな、スパイでもゆるすのかなあ、と思つていた時、パーンと鳴つたんです。その兵隊のところで鳴つたんです。そうしてわたしはスパイではなかったのかな、

間違っておったのかなあと思っっている間に、その男は倒れてしまいました。

それからわたしは考えて見ました。自分もスパイと間違われて、危いことであつたと思いましたが、これはわたしの想像であります。あの殺された男はスパイではなかつたと思ひました。妻子を弾で殺されて、気が変になつて、フラフラ歩いていたのでスパイといふことになつたのではないかと思ひました。

それでわたしは、「戦」といふものは、どこの人が殺すかわからんものだな、これは、自分の国の兵隊とか敵の兵隊とかいふことはいないんだな、疑わしいといつて、自分の国の避難民でも殺すものだな、いくさといふものは」と思ひました。日本の何部隊といふことはわかりませんが、後ろから一発で打ち殺したのに間違ひはありません。それは、あさつては玉碎になるといふ頃だつたと憶えております。

長男は怪我やつて、繻帯などは洗う水がないから、着物やタオルなどで巻いておりましたが、あとまあ、ふんどし一本になつてからに、着物も帯もすべて繻帯につかつて、虫が出る時にはこれを捨てて、また着物で巻いておりました。それでまあ六月二十日頃になつたら、百坪くらいの山の中に十人余りも毎日人が死んで、シャベルを借りに来る人がいるので、こんなに激しくは、こつちにおつたらいつやられるか、駄目になるかわからんといつて、まあ、いくさを突破して中頭の方に戻ろうといつたら、それがいいなあ、といふことになつた。芋掘りにも行かれない、出ることもできないから、煮てある芋を食べた皮もいっしょに入れたのを持って、西原へ

を殺さないといつて、水を入れて沸ぎりました。

それから男は一応縄をなう茅を茹りて来たんです。それで女に縄をつくらしてからに、男はまたこの砂糖小屋の茅は反対に逆になつて水が中に落ちるからといつて、この茅を取りくずして、そつちから垂木も取つてからに、下の屋敷の焼けた家の壁が石垣ばかり立っていました。そこへ行って垂木で骨組をつくつて、砂糖小屋の茅と自分たちで茹りて来た茅もいっしょにやつて、一日で出来る家を作つてその中に入つて山里で暮らしていたんですが、だが、その家の広さが、三畳半くらいあつたと思ひますが、これに家族が、我謝のガ一シド小（屋号）から喜屋武小（屋号）また、下門（屋号）わたしたち、また次男前ジャク小、ジッケンダの下門、六軒の家族がこれに入ることにになりました。せまくてせまくて、どうにもならないし、まあ、その時は、一名の寝る場所は八寸程度くらいになつておりました。

雨が降つたら、敷いてある茅がざくざくになる、そうしたら昼は出して干して、夜はそれを敷いて、まるで豚小屋の豚みたいになんばいであつたんです。

それからまあわたしは、長男が怪我しておるので、こんなふうになつて置いてはいかんと思つてからに、これはどうやうしたらいいかなと思つて、上原というところが山里の上にあります、そつちの崖下に古い担架が落ちてありましたから、その担架を取つて来て、それに長男一人は寝かして、まあ、ほかの人は、足が家からはみ出ているのもおりますし、壁に腰を凭れたまま眠るのもおつたんです。

戻ることにした。

与座・仲座の三叉路に向かう時に、機関銃を撃たれてから、夜明けに行こう、そうしたら見えるからといつて、山の中を歩いていく時に、ギーザの前の坂を下りたところの溝に米兵が潜伏しておつて、下りて行つたら、すぐ出てからに、「来い」といふて捕虜になつて、具志頭の学校の川のそばで、取り調べを受け、女子供はトラックに乗せた。男は、いちいちそこで検査をやられてからに、子供は泣いている。検査はすでにすんでおるところだが、子供が泣いているので、お前はあの子供をつれて行け、といわれたが、検査受けたという証明を取らんで、富里の収容所に来ました。家族とも、妻ともそれっきり別れるんだと心配やつていたところをまたいっしょになつたから、どこまでもいっしょに行こうといつてからに、そこに来たら、怪我人は治療するから、病院があつちにあるからあつち行つて治療して来いといふので、わたしは長男を抱いて、病院へ行つたんです。

それから、富里に来てからは、まあ、長男を治療してからに、自分の行きたいところに、知念半島のどこへでも行つていいといふことで、五時までは歩けるから、富里の方から出かけて、そうして歩いたら、知念村の山里に、ちょうど五時頃に着くことができました。

そうして、あつちの製糖小屋がつぶされて、棟の木が地面へついたら、何かしら危なかしい感じもするところでしたが、その家に入つて一晩は明かして、それでこの上には樋川といつて水が流れている井戸があつたから、そつちで体も洗つてまた着物も鍋に入れて、虱れをといひ替へたんです。

それから、作業もあつた。そうして妻がやがてお産もありますので、このままではいかんと思ひましたから、山に行つて、竹を切つて来て、自分の家を大きく作つて入りました。うしろは岩があつて、それを壁にしましたが、前は焼き払われて何も無いところでありました。茅はまた製糖小屋の煤のついたのがありましたので、それをといひ替へたんです。

それで怪我した子供等は中の方に寝かしまして、自分たちは、足が家のそとに出てもいいといつたあんばいで寝ておりました。

そうして暮らしていると、佐敷村の屋比久から、人さしがしに来ている。その人から、わたしの妻の親が生きているといふことを聞きましたので、そんなら、いっしょに行つて連れて来ようといつて、その母親を連れにわたしが行きました。そうしたら親は、「あなたの家族は沢山残つておるか」と聞きましたので、「いや、沢山といつても三男とお父さんは亡くなったよ」といつたら、まあ妻の母親の方でも自分の子供が妊娠しているといふことはわかつていたので「妻はどうしているか」とききますので、「どうもない、怪我もしないで、元氣でおる」といつたら、「そうかそんならいっしょに行こう」といひました。そうして、妻の母は、「わたしの家は誰もおらん、わたし一人だけが残つておる」といわれて、そこではじめて、親からききました。

それから五時後から通つたら敵と思つて撃たれるから、五時後から通ることはできなくなつた。そつちからは出たけれども、屋比久の部落までには五時を過ぎて、日は明るいを通れんようになりまして。そうしてわたしに言つた人は屋比久の人で、そつちの男の家の

軒下で一晩は過しました。

そうして、屋比久と山里の配給がどんなものかということもその夜話しをしたら、安谷屋チョウシンさんの家族も、「そんならわたしも行く、あつちは毎日の配給があるなら」といって、それからキヨシも連れて、母もつれて、安谷屋さんいっしょに出てからに、この山里に来て暮しておりました。

それでキヨシが来たので、男が三名ということになったんだから、まあ、気も強くなり、自分のいとこの子だから、何を言うにも言い易いからといって、「家を作ろうなキヨシ」といって、「はい」といった。そうして山に行つて、木を切つて来てからに、わたしは茅を茹りてからに、山から木は伐つていかんということであるが、住む家は住むことができないからいわば盗んで来たわけである、そうして家を作つたんです。その時までは配給といつてもお米だけであつた。それで畑のシルチンナン（穀の白いかたつむり）畑チンナンですが、穀の褐色の大きな牛チンナンといつかたつむりもありませんが、あれはうまいんですが、なかなか見つかりません。白チンナンは畑に余計おります。芋蔓の下などによくおりますので、これも取つて来てからに、芋は煮ないで、「ウムニー」といって、それにこれを食べさせると、今まで食べているカタツムリの糞が、その芋ニーと入れ代つて、中味も芋ニーのようになりますので、そのカタツムリを、皮肉な言い方で、うちにはウムニーがあるといつて食べておりました。またアフリカマイマイも見たら食べまして、まあ、食べるものは何でも食べるという暮しをしておりました。

察証明で通れるという噂は聞いておるが、実際は、やったことありません。だが警官に言つたら、そんなこと聞いておらんがなあと言われたので、遺骨拾集といつてあると聞いて来たよ、といつたら、遺骨拾集というのは、道に倒れた遺骨を拾うもんだよと警察が言つたが、それでも皆が行く時に取つて来んといかんといつて、そうしてまた妻の母にも、わたしは行くがあなたいられるか、といつたら、「はあ、わたしも、親も子も遺骨があるから」といふ。行つたところは人の屋敷であつたから、ブルで敷いて無くなつていました。わたしのものは、摩文仁の裏の岩の陰の畑の隅であつて、何もさわつておらん。石も置いたままで目じるしは石でやつておりました。その上から戦車が通つております。その入れたところは、岩の穴になつておるところでありましたから骨にはどうもしておりませんでした。そうして立派に取りまして、移動するまでは、山里に自分がおる庭のがわに置いておいて、移動の時には、また我謝に持つて来て、それからその年の棚機には墓参りを許すといふことになつたので、その時にお父さんの骨も取り、子供の骨も持つて来て、墓に入れて、墓の門を閉めたのであります。

この話は、そうまでキツク（悲惨の意味に取れた）はなかつた、何もあつたというが（意味曖昧）、沖縄の戦さの時にはまあ負け戦さのために自分の畑に食べ物を取りにも行かれませんでした、また、死んだ肉親に土を被せるぐらいでもその道具がなければ見て捨てて通るくらいである。また兵隊が「出ろ」といえば、完全の壕といえども出されて、国のためといつてからに、自分の命が危いことに

そうして暮しておりましたが、妻に子供ができました。妊娠中に戦争の中を歩き廻つて、捕虜になつて一か月という時にお産をしました。

わたしは、はじめは三十七班の班長としておりましたが、班の編成へんせいで、後には七班になりました。その間は、怪我した長男を百名と志喜屋の方へつれて行つてやるのが午前中の仕事、また午後は班長会に出ると、また配給を取り、それを配給するのが仕事で、あつちにおりました。配給係りでは満足でないということになつて、妻の母に、この子供は、あなた午前中に、毎日治療させて貰い度い、わたしは作業に行かないと食うのがないからといって、わたしは軍作業に行つてからに、この治療は妻の母に頼んでいたのですが、その頃子供は杖をついたらようやく歩くくらいでありましたんですが、これが一週間ばかりやつたら、またこの折れた右足が、同じ子供等と何か品物を引つ張り合つて、転んだといつてまた折れてしもうたんです。歩いてから。そうしたら、また大変だといつてからに、また作業も止めて、アメリカ医者のいる百名の方に言つて、ギフスも巻いた。この股から腹まで巻いて、それでこれはいつ取るかといつた。百日後に取るという。そうして、山里で一年余り班長としてやつて、西原に移動して来たわけでありました。

その時、長男は数え十歳でしたかな、次男は七歳でした。三男は五つ、わたしはそう憶えています。

三男の遺骨は、西原に移動するといふとき、西原からは摩文仁は遠い、山里からは近いから取つて帰ろうといふことになつた。警

なつて行きますから、こんなことを考えましたら絶対に戦さは無くして、物事は相談でやつて行くのがいいという考えがあります。上の人でもそれを考えて下さつたら非常に有難いと思います。二度と戦さが、沖縄に戦さがあつたら大変だろうと思ひます。

わたしの本家は、おばあ、常子、孫が二名、曾孫が二名、六名が全滅しています。これはわたしの本家で曾孫も一か所に軒で暮しておつたのがみんな全滅しています。長女の子の曾孫が二人でありました。若い者たちは、島尻まで行つておつたことは、島尻の真壁でも見た、また与座・仲座でも見たという人がいるが、おばあさんは、部落の壕でわたしと別れましたが、それっきり誰も見たという人はおりません。みんな亡くなつて行方もわかりません。

竹槍は摩文仁におつた時ですが、あつちまでは妹に杖にさせて持つて行つたんです。それは木の上に人に怪我がないように置いてあつたんですが、そこに艦砲が落ちてその弾力でまた石が飛んで来て、この竿を二つ三つに砕いてしまつたんです。それから後はあつちが石が多くて掘りにくいので、芋堀りのあさりに使つておりました。

この竹槍の先は、芋あさりの道具として持つて来たんです。わたしはシヤベルも鎌も、この竹槍の先も筵に包んで、それを畚に入れて、その上に長男を坐らして、他の方にはいろいろのものを畚に入れて、天秤棒で担いで持つておりました。具志頭では、持つておるものを全部検査して、揮まではずして見せましたら、アラアラして笑いました。そうして持つたものは持たしてくれました。

註(1) 喜屋武さんの奥さんの実家も、悲惨な戦争犠牲で九人家族

中、三人だけが生き残った。奥さんの兄であるその家の父は五十二歳、長女三十四歳、四女二十二歳（補助看護婦）、長男二十歳（現地召集現役）、次男十七歳（防衛召集）、五女十四歳、この六人が戦争で敵弾のために斃れて、母五十歳、次女三十歳、三女二十五歳の三人だけが生き残って、現在は老いた母親が一人暮らしの淋しい月日を送っているとのことである。

註② 喜屋武さんの記録には、非常に重大なことが語られている。喜屋武さんが摩文仁に行ったのは、沖縄戦三十二軍の牛島軍司令官等が摩文仁の丘の尖端の崖の中腹壕に逃げ込んでから、十日内外の日数が経って後である。それにも拘わらず、摩文仁はまったく戦争がない。艦砲や爆弾を初めアメリカからの攻撃が全然なくて、朝晩飛行機が上空を飛んで行くだけであつたといっている。そうして摩文仁から移動する前三、四日あるいは四、五日か、その間は、熾烈な攻撃を受けている。そうして喜屋武さんの移動は、牛島、長、自決の二日前である。

ところが、牛島、長が沖縄本島南端の崖の壕に隠れていた五月三十日から六月二十三日の自決するまでに、中・南部の沖縄県の避難民はアメリカの有らゆる近代兵器の言語に絶する極限の攻撃を受けて、島尻郡の中央部において、十数万を上廻ると予想される犠牲者を出した。

それでは、どうしてこうも多くの沖縄県民の犠牲者が出たのであろう。組織を崩壊して敗残兵になった日本の兵隊たちに壕を追いつた出され、隠れ場を失い、熾烈な米軍の攻撃にさらされた。

米軍は何故に、沖縄の民衆が生命を守るために逃げまどつてい

徴用行つて来て、体が弱って熱も出て寝ているところに召集が来たんです。はじめは首里の町端、あそこに収容されましたが、わたしも沢山の子供がいて、金もないし大変だったから面会に行かなくなりました。来て、面会に来てくれと伝言がありましたから、その時に行つたら、熱が出ていて、「今日は熱が出ているが、金城町に移動して行くから見送ってくれ」といってね、そして後姿を見ただけです、その時。（いくらか涙声となる）それで帰つて来て、その時は豆も植えてですね、子供たちもみんな畑につれて行って植えたのですが、その豆も取らなかつたんです、上陸したからそのまま。それで壕にあらちち入つてまた子供たちを壕において、自分で芋を掘つて来て、六時頃なつたらまた何か炊いて食べさせて、みんなが島尻に避難すると自分はどうするかと心配してね、金もないし。

その時わたしの父の妹、わたしのおばさんが那覇にいましたが、あの人が金を五円わたしにやっつて、「これで子供等もつれて、みんな島尻に避難しなさい」といわれて、それでこのくれている五円を持って、小さい子供をおんぶして、少しの食べ物を担いで、子供たちをつれて、また一人はわたしのいとこの妻ですが、あれといっしょに出たんです。

そうして首里の金城町に行きまして、そこで少し休んで、島尻へ向かつて夜歩きました。九つ七つなる男の子は、小さい鍋を持ちましてね、食物は沢山は持ってませんから、布呂敷に包んだのを頭にのせて、二つの子は背中に負んぶしておりますからね。連れは同じ部落の人が四名いっしょになって、南風原村の宮平・兼城へ行きまして、それから志多伯へ行きました。そこに壕があつたんです。この

るのに惨酷な殺戮をやつたか、これにはそれ相応の理由がある。それについてこの喜屋武さんの記録で考えさせるものがある。三十二軍最高幹部の隠遁に原因することに思い当る。それに関する思い当ることは本巻の巻頭で委しく述べることとする。

与那城 ツル（三十六歳） 主婦

夫は兵隊に行つて帰つて来ましたが、徴用に取られまして、読谷飛行場に、また小禄の飛行場にも行きました。兵隊行つて来たもんですから班長になって、全然家に帰つて来なかつたんです。それでわたしは自分一人で、子供五名、またその時までは姑が、七十になつていられたがおられたんです。

子供は上が十四の女、また九つの男、八つの男、それから六つの女、また満二つの男、この五名です。この五名をつれて、空襲がある時、あらちち歩きましたが、はじめは部落壕にいました。そこがいられなくなりまして、自分の壕が丘の後にあつたんですが、そこへ行つて、あんまり空襲が激しくて、またそこは不便でもあつたんです。それで自分等の墓にしようかと思つたんですが、この墓は自分の舅が十九年の四月に亡くなって入つていまして、まだ一年にしかなつていません。それでそこにはいることができないと思つて、そこを諦めた。部落の壕に行つたところ、みんな島尻に避難して行くから、自分も自分ひとり。夫は支那事変に行つて来て、また沖縄での召集は首里の金城町にされたんです。その時にも

壕は大きかつたんです。わたしの家族のほかにも、いっしょになつた四人もそこへ入りました。

その壕に入つて六時頃になつたので、芋を掘りに行きました。そうしたら畑の主がいて、勝手に掘ることができませんで、みんなが一円ずつ出して四名分、四円でこれだけ（畑の広さ）といつてね、それで芋は掘つて、また人参とか野菜類を集めて来るんです。そうしてその壕の前に家があつたんです、一軒。その家は主はみんな避難して自分の壕に行つていた。それでそこは空家であつたからその炊事場に行つて、芋も人参も玉菜（キャベツ）もすべていっしょに鍋一つに入れて、炊いて、それを壕に持つて行って食べさせておりました。

炊事をする時の薪木は、人の家の天井に置いてある甘蔗の搾り殻を天井に上つて取つて来てやりました。

ちょうど前の家で炊事をしておりましたが、アメリカの飛行機が、あの何といひますかな燃やすもの、焼夷弾です、その家に落ちて、他人も沢山炊事していましたが、できかけている食べ物もそのまま置いて、二つなる子供もつれておりましたから、子供をあわてて抱かえて、飛び出しました。この家の後は丘になって、木がありましたからその木を掴まへて上つて壕に行つたんです。

それでそこで暮されるまでは暮して、五、六日おりましたでしようね。そうしたら、友軍の兵隊が来て、アメリカが来るので、ここは兵隊が使うから、あなたがたは前に行かないと大変よ、といつてね。それでこっちから出て、高嶺村の与座を通つて大里部落へ行きました。糸満へ行く道のある部落で大きな井戸のあるところでした。

た。

そこは部落の家が焼かれてはいませんでしたよ。壕に行くことはできない、人の家におりました。その家には同じ部落のほかの家族もいっしょにおりました。

大里も激しくて、一晩だけそこにおりまして、出ました。夕方の一時と朝また三十分ぐらいは休みますが、主に艦砲で夜もやりましますよ。夜は照明弾も絶えず上ります。

それから伊敷というところに行きましたが、そこも大変激しかったです。一晩泊って、そこを出て、真壁・伊原というところがあるんですよ。そこに行ったら、大変な避難民でしたよ。それで人の家に入ったら、そこは兵隊もいましたよ。わたしたちは台所に、友軍の兵隊は上に坐っていて、またその隣りは低い石垣を隔てて、そこはまた宜野湾の人が大勢いた。それであの石垣の中の家に爆弾が落ちて、わたしたちが入っていた家の上座にいた人はみんな爆風で倒れてね、わたしたち炊事場にいただけが助かったんです（炊事場は床がなく十間で床のある上座より低い）。わたしたちのいた家は上座には友軍の兵隊と避難民が十名そこらしかいませんでしたが、隣の家には避難民が大勢おりました。それは全滅でしたよ。わたしたちがいたところの家も半分は皆爆風でなくなりました。

そこでわたしの六つなる女の子が台所の床の上にこれ一人坐っていたんです。その時に、あっちからの破片で頭も、この右の片手も、右がわの背中にも破片が入って右がわは全体破片が入っていました。今も疵がありますよ。学校上った時、はげがあるので恥かしいと思いました。今もはげは恥かしいといえます。もう今は二十九に

亡くなる時に「あなたがたに置き去りにされるかと思って一生懸命でした」と、これだけ言いました。

その家には大勢人が集まっていました。自分の部落の人が何人亡くなりましたかね（その人びとの家号と人名を小声で思い出す）、自分の部落の人が六名亡くなりました。機関砲といいますが、海の方からパラパラパラというやって来てたんです。

それでその畑にいとこの嫁は埋めました。自分の部落の人がおりましたから頼んで。

註、与那城さんが、同席の喜屋武美則さんに振り向き、「あのシムゾウ小ターヤー」と呼びかけると、美則さんは「幸助」と口をついて応じた。つまり屋号下門小の幸助たちが埋葬したと、当時がこの人たちには、昨日のことのようにはつきりしているように感じられた。与那城さんのいとこの嫁の名は安谷屋千代、未年の人で二十五、六になつていたが、結婚式はしたのに、夫がすぐに兵隊に召集されたので妊娠もしなかった、したがって子供もできなかった、新婚時代というよろこびも奪われた、といったことが、出席者の口ぐちから語られた。安谷屋千代さんの死は、出血は全然ないで、次第にしびれが全身へひろがって行った。弾が体内に入ったことにはちがいないが、どうしてどこにあったのかはわからなかったと与那城さんは話された。

この安谷屋さんの死の様子を聞いてみると、これまでの座談会では考えたことのない思いが浮んだ。新婚間もなく、夫が兵隊に召集された若い女、安谷屋千代さんを無慚に殺させた者は誰であるか。殺した弾はどこで、どんなにして、誰がつくったか。この

なりまして元気です。そうして、この子は血がたらたら流れて泣きました。その爆弾が一度落ちるとまた三回つづけて落ちるといってね、それでその家から出ないでまた落ちたら大変だから、小さい子は負んぶした。その下の子は手を引いて、泣くとまた落ちるよ、泣くなといって、泣くの手を引きずって、石垣の陰に避難した。またしばらくバンバンしたが、夕方になって飛行機が休む時に、別のところに連れて行って、着換えさせてた。この着ていた洋服は血がしぼられるぐらいで、それで着換えさせて、一晩はそこに泊って、また別の家に避難した。その家は家主が床を全部はずして壕へ持って行って、床持だけ残っていたが、その床持だけの床下に入っ

て、そこに皆寝た。

その時に、わたしのいとこの嫁さんが、機関砲の弾が体の中に入ったように、疵口はわからなかったが、片手がしびれてね、わたしは一晩中ですね、子供を負んぶして、またカズエ（長女）も、あれもんでくれて、もんでくれ、もんでくれといって、ウッチャンギリーガスランチ（捨て置かれるのでないかと思って）いつも移動、移動でしよう、だから置き去られるかと思ってね、夜中、按摩してくれといつづけた。それでわたしは子供を負んぶして、夜じゅう床下に寝てこれを按摩したですよ。そうしてこれが夫は兵隊に行っておるから、これが恩賜の煙草といってたね、それを持っていったよ。そうしてわたしに見られない間にこの煙草を食べようとしたので、わたしは見てしまったのでそれを取って捨て、それはあまり苦しいのでやめたはずですよ。弾が中に入って、体は痺れて、それで一晩と一日生きていましたが、翌日の夕暮れに亡くなったんです。

弾をどこで、誰が、どうして撃ったのであろうか。その弾はどこからどう飛んで来たのか、このような一連のことが、取り止りもなく思われるのであった。

それから、安谷屋千代さんを埋葬してくれた下門小の幸助のお父さんも、千代さんといっしょに弾に当たって怪我した。それでそこを立ち退くに当たって家族が担いで大渡浜まで連れて行ったが、大渡浜で、この弾に当たった怪我のために亡くなった、と与那城さんは語った。その弾は艦砲でもない、爆弾でもない、海の方から撃って来る機関砲だと話している。米軍の浴びせたすべての火器の弾を調べると、該当するものがあって、それがどんな弾であったかわかるだろう。その調査は可能の限りやるつもりである。

それで、それが亡くなりましたから、わたしたちは力が弱ってですね、その夜は、わたしはずっと泣きつづけたんです。いっしょの人たちにも頼る人がいないから、もう大変だと思って、涙を流して泣いていたんですが、そうしたら、その場合に、わたしの上の子が、「みんな行くからいっしょに行こうよお母さん」といったんです。それでわたしは、「いいえ、そうは言わないで、いっしょに行かないようにしよう」と言っただけです。そうして、その子が床の下から頭を出して起き上ろうとした時に、こっち（耳の上）に破片が当たってね、わたしは、この子はもう駄目になったのではないかと思っただけです。そう思いながらも手早く引っついていて破片を取って捨てました。思ったほどではなく、子供は何でもありませんでした。

それから、そこから出て、あちこち歩いて捕虜されました。大渡

の浜端(ばた)の阿檀の葉の中に一日いて、また摩文仁に行つて、それから具志頭に行つて、具志頭の人の家で捕虜された。それでも自分の家へ帰ろうと思つてですね、その時は。みんな人の家に泊りました。捕虜といいますが、アメリカがあちこち困んでですね、捕虜されたという気持はなかつたんです。ここを通過して、もう戦は終つたから、自分の家へ帰れると思つたんですよ、その時は。そうして、富里というところに連れて行かれました。もうあつちに行つてからは、捕虜されて自分の家へ帰ることはできないと思つたんですよ。

捕虜なるまでの食べ物は大変困りました。男の人がおつたら、どうしてでも取つて来るがね、わたしはまあ出ることもできないし、小さい子供ばかり連れておりますから大変でした。芋は、志多伯で一円ずつ出して掘つただけで、それから後は、芋は一度も掘りません。それで捕虜なるまで何も食べませんでした。

子供を負んぶして、少し米を持っておりましたから、伊原までは、少しずつおじやを炊いて食べさせました。それから、畑から砂糖キビを取つて食べたことがあります。食べるものがないので、何も食べなかつたので、子供たちは栄養失調になつて、二人は亡くなつたんです。

捕虜されて、富里に收容された。それから、自分の家の近いところへ行く方がいいというので、左敷村の富祖崎に移動しました。

そうしたらそれから、また与那原の浜で、アメリカ軍に、船に乗せられて山原に、辺野古におろされて、トーキ、二見、大浦を通つて大川につれて行かれました。

ジロの葉といつてありますでしょう、あれで葺いて、雨が降る時にはバラバラ漏つた。その家に四か月か五か月かおつた。それはただ一坪に一家族いた。また床は、山原竹(北部の山中の自然生の竹、直径一センチ内外、長さは三メートル内外)で編んで、その避難小屋は共同でつくつてありました。

それから、山の中から移動して、部落に近いところへ来ました。配給は、米はほんの少しずつ、あの罐詰のカンカラーに、トウモロコシが多かつたんですから、それを鉄カブトに入れて、割つて砕いて、それを炊いて、八つなる男の子と、上の女の子と九つなる女の子と四名くらしておりました。

そうして、西原へ移動になるといつたら、皆喜んでおりましたけれど、わたしは嬉しくなかつたんです。その時は、二人の子供たちをそこにおいてありますからね、余所の人たちには冗談を言つて笑つていましたけれども、西原に帰つて、そこに置いてある子供たちを連れに来ることもできないと思つてね、移動する時は、また大変でした。二人の子供の遺骨を持って帰りました。

そうして我謝に来ました。我謝に来てからも大変困りました。金もないしね、食べ物もないし、大変困つた。冬になつても被るものがないでしょう。

それもないので困つていたのですが、部落に配給があつたんですよ、わたしたちが何も無いから、わたしたちにまわして貰うことになりましたが、それも金を出さねばなりません。七十円で、いや七円ですかね。この金がありませんから、取ることはできませんで、流してしもうほかはないといつて、毛布一枚だけは持つ

もう大川に行つてからは大変です。戦争では六つになる子が破片に当たつた、わたしがまたこつち(左のかいな)に破片が当たつた。それだけで、みんな助かつたんですが、大川は、ヤラリアで毎日のように人が死ぬ。また食料もなく、大川に行つてからは、配給もただで、小さい二つになる子は栄養不良で九月十一日に亡くなつた。またあの九つなる男の子が悪性マラリアにかかつて、これは十月十一日に亡くなつた。それから八つになる男の子は、また腎臓病にかかつてね、体が腫れた。この子がどうなるのかと思つて心配しながら、自分ひとりでヨモギの葉を取つて来たり、この腎臓の葉になる何とか、そんなものを摘んで来て煎じてくれた。腎臓病は、塩気のないものを食べると悪いから、何も食べてはいけませんよ、人が罐詰を食べていても食べるなよと注意をさせました。そうしてヤブ(敷医者から来た言葉でないだろうか、素人で、他人の病気を治療している人)の家に行つたら、もう駄目だといいました。それで、これもここで、みんな亡くなるのかと思つていましたが、やつぱり口を慎まして、川から小蟹を取つて来て、煎じて飲んだり、また蛙を取つて来て煎じてやつたり、あれこれ草の葉で下し薬といつて煎じて飲んだりしましたから、ようやく腫れが引きました、これひとりはお助かるんだな、と安心しました。この子が腎臓病にかかつている間に、また六つになる女の子は、ほとんどからだじゅうに疥癬が出てですね、足が曲つておりました。それで自分一人で見てもやらねばなりませんでした。

わたしがいたところは、大川のずっと山奥に避難小屋をつくつてあつた、避難小屋といつても、ただ、茅でなく、ワラビ(ウラテイ)といつたから、一家族、四人この一枚でくらししました。

またつきに、一班二班といつて、班の配給があつて、あのアメリカ敷布団小、小さいですね、籤を引きまして、三等当つたので、その一つを貰いました。

夫はどうとう帰つて来ませんでした。移動するので面会に来てくれといつて、人に伝言してありましたので首里の町端(首里高校裏手一帯)の收容所へ行つて、今日は熱があるといつていましたが、同じ首里の金城(町)へ移動して行きました。その時、後姿を見送つたのが最後です。その後、どこへ行つて、どんな戦争をして、どうして亡くなつたのか、誰も知らせてくれる人はおりませんでした。

註、淡々と話す和那城さんが、夫君のことを訊くと、答える時には声をうるませた。島尻地方を逃げ廻つていて、捕虜生活をして大川にいられた時との食糧事情を具体的に話して貰おうと引き出すことに努めたが、大変でした、と抽象的に答えて、委しいことは話して貰へなかつた。島尻地方を逃げ廻つていた時には、志多伯で芋を掘つて食べただけで、その後は芋を取つて食べることはできなくて、いくらか持っている米を少しずつ、小さい鍋に炊いて、日に一回だけそれを分け合つて食べ、あるいは一日中全然食べないこともあつた、とのことである。くわしい、具体的な話は語つて貰えなかつたが、熾烈な米軍砲火の中を、五人の幼い子供たちを引きつれて逃げ廻つて三十三歳の母親の姿は十分に想像ができる。

西原村民は、村に帰つたといつても、一応我謝部落に集団生

活をさせられて、そこである期間をすごして各自の部落へ帰ることが許されたが、与那城さんの桃原部落もご多分に漏れず、家は跡形なく破壊されてその焼き払われた中へ帰ったのである。幼い三人の子供を抱えた与那城さんは、自分の部落へ帰ってからも想像に絶するものがあつたに違いない。

その戦争からすでに二十六年の日月が過ぎていたが、与那城さんの残った三人の子供さんたちは無事に成人しているとのこと、せめてもの幸せである。当時、三十六歳の若い母親だったが、戦争未亡人としての二十六年の歳月が流れ、六十余歳の初老の境へ入っている与那城ツルさんである。無表情のようにもあり、人生の苦難を堪え抜いて来た強い心を体の奥深く持つていられるようにも見える。がしかし、この方の人生は、ほとんどが涙と苦しみに終始したことが推察される。

夫がずっと召集兵から徴用へと、戦争の犠牲になり、義姉から僅か五円の金を恵まれて島尻へ逃げのびる。幼い五人の子供を引きつれて熾烈に降りそそぐ砲火の中を逃げ迷い、せつかく、運よく戦火では皆が助ったが、捕虜生活で二人の子供を栄養失調で失い、二人の子供も難病に襲われて苦難の月日を送られる。

喜屋武 美 則 (十八歳) 最後の防衛召集

現地の軍作業徴用が始まる昭和十九年、月は記憶しないが、その頃若い者には、長崎の軍関係の仕事に就くための長崎徴用というのがあつたんです。十八年の末頃かそれとも十九年になってからであ

ら、兵隊からえらい剣幕で怒られたんです。「遅刻生」といって。令状は昨日しか来ない、今日の七時集合といつてあるのでその通りに来ましたといつたら、「皆は六日に来ているのに君等は遅刻生だ」といってですね、理屈も何もありません、怒り散らされて、「遅刻生」を連発して叱られました、わたしと同じように令状通り行つたのは四名で、みんなは一日前に行つていました。

そうして身体検査を受けて、防衛召集入隊となりました、そうするとすぐにシャベルからいろいろの道具を担いで、陣地構築に行つたわけですよ。何日それをやりましたかね、それから西原翁長の石部隊に編制されて、今の棚原の後の遊び広場で、壕掘りを一週間位したですね。それであつちでは軍から飯はあつたんですが、みんな若い者の集りだもんですから、金を出し合つて、買い食いをしてしましたよ。そこに一週間ぐらい壕掘をしているうちに、いよいよ状況が悪くなって、防衛隊も全部、あの我如古(宜野湾市)に集められたわけですよ。あつちに行つて何をするかといつたら、戦車壕といつて、溝ですね、敵の戦車をこれに落とすといつてですね、これをつくるのに馬力をかけたですね、兵隊が鞭を持って。この作業をつづけていると、いよいよ三月二十三日からアメリカの全力空襲が始まつたので、これをやるのができないわけです。星は仕事ができないから、作業を取り止め、壕に隠れていました。石部隊の防衛隊はほとんどあつちに集中した。それで夜になつたら、地雷ですね、その敷設ですよ。

いよいよ明日は上陸という三月三十一日には、また部隊の編制になつたんですよ。石部隊みんな並べてですね、何名、何名と切つ

つたか、わたくしは兄と親から、その徴用をまぬかれる仕事に入っているようにすすめられた。ミヤギバスにうちの部落の者がひとりいたんですが、わたしに、そこへ入つておれば産業戦士として徴用をまぬかれるから来ないかといわれて、彼の紹介でミヤギバス会社に入つていたわけです。

それで村役場から、徴用の令状が来ましたので、会社の証明書を持つて、わたしはこうこうだと言つたら、君等はこんな書類持つて来て、軍に協力しないのか、つぎに来る令状からは、どんな書類を持つて来て、決してゆるさないぞ、といつて怒られたんです。そうして昭和二十年の三月になつていたんですが、徴用ではなくて、防衛召集を受けました。防衛隊の最後の召集ですね。

ミヤギバスというのは、与那原を中心に、泡瀬と佐敷とが路線でありましたが、わたしは最終の泡瀬線に乗つて、泡瀬へ行きまして、ほんとは泡瀬に泊つて、泡瀬からの一番車として与那原へ帰るのでしたが、代理で行つたので泡瀬に泊りたくないの、与那原へ戻つて睡りました。

そうして翌日は遅番になりましたので、ゆっくり眠つて、自転車の家へ帰ることにして、我謝入口へさしかかると、オイ、オイといつて兄に止められて、防衛召集令状が来ていって渡されました。それでわたしは、令状を持つたまま会社へ行きました。召集されたことを会社に知らさねばなりませんので。そうしてわたしは家へ帰つて、令状をよく見ましたら、明るる日の午前七時、今の浦添仲間の浦添小学校となつていました。

それであつちには、令状の時間に遅れないようにして行きました

て、分けられて、僕たちは、中城村の南上原に、同じ石部隊でありましたが、あつちには配置されました。南上原の方は、壕も相当に掘つてあつたから、改めて壕を掘られることもなく、また食糧もよかつたんです。約一週間目、七日ほどしたら、戦闘開始になつたんですよ。

そうしたら敵の攻撃が激しくて屋中は絶対にそこにはいられないんですよ。それで壕にこもつていられるほかにないわけです。斥候だつたと思うんですが、自分等の壕と五十メートルぐらいに接近して来たんですよ、アメリカが。それを見て、壕の入口に立つていた歩哨が「憎らしいこの野郎殺してやれ」といって一発やつたわけですよ。そうしたらそれからもう、迫撃から、バラバラ、これたち二、三名に攻撃されたですね。僕等は機関銃を持って、弾薬は六百、軽機だつたんです。こつちに来て機関銃といつて編制された。もうひとり部落のものがいたが、六日の晩これは逃げていないんですよ。うちに僕より先に帰つて来ているんです。

そうして朝になつたら、一時間も経たないうちに、もうほとんどやられてしまつてですね、ちりちりばらばらになつた。こうなつたら僕等は行くところがないから、わしももう家に帰るといって、そうして、家へ帰るところをまた余所の部隊に掴まされたわけですよ、わしは。掴まされたというより、君何かというから、わたしはこれこれといつたら、わたしたちはそこへ行くから案内してくれ、といわれて、また同じ自分の壕のところに道案内して行つたわけですよ。

それでもう星になつたら飛行機やら、この中城の伊集部落です

ね、あの部落の西がわの崖、上の方へ相当数のアメリカ兵が上って来るんですよ。その日はもう飛行機から、また上って来た兵隊から攻撃されて大変だったんですよ。それで僕等は一日中壕で暮らしていたんですよ。もう五時頃であったんですけどね、まだ太陽があったんですけど、上って来たアメリカ兵が近づいて来たんですけど、みんなちりぢりばらばら、逃げてしまったんですよ。わしは武器は何も持っていないですよ。それで他府県出身の一等兵でしたが、それと、海軍の兵隊と三名残ってしまってますね、逃げるにも逃げられないで。そうして北上原の戦争から生き残っているこの陸軍の兵隊が、どうしようか、もう諦めて死のうかといっただんですよ。そういったら海軍の兵隊が、こっちで死んではいかん、島尻には相当兵力は残っておる、わしはまた嘉手納から生きのびて来たんだから、小祿の本部まで行かねばならん、こっちでは死なない、ここで死ぬのは大死にだ、わしは死なん、といっただんですよ。そうして、この人が壕の枠をよじ登って壊してすな、それを落して来たんですよ。それでそこから上に上って見たら散兵壕といっただよこの丘の中腹から逃げ道があるんですよ。その中を立って歩いたらやられるからですね、かがんでまわって見たら、銃眼になっているんですよ。機関銃などを撃つ銃眼ですね、セメンで固めてあるんですよ。海軍の兵隊は先に出た。この陸軍の兵隊は、鉄砲持っているし、弾薬も持っているし、出られないんですよ。それで弾薬をはずして、海軍の兵隊にそれを渡してすな、出たわけですよ。それで二人は出てわたしは残されたんですよ。わたしは海軍の兵隊から、米軍の兵隊は、機関兵がすぐそこに来ていて、戦車もすぐ後に来ていると聞かされ

ですね。兵隊では井戸水を飲まなかったんですよ。わたしは、兵隊を逃げて来たわけですから、掴まると大変だと思って、西原あたりの兵隊はどこにいるかと訊いたんですよ。道は通らんで、自分の部族の方へ真直ぐに、一目算に夜、帰って来たんですよ。

それで帰って、自分の壕に行ったら、いないんですよ、親戚もみんなが入っていたんですけど、訊いたら、みんな上の丘へ行って、墓を開けて入っているからあっちへ行きなさいといわれたんですよ。うして家族といっしょになったのは、夜で暗い時だったんですよ。

わたしのお父さんも石部隊の同じ中隊で、わたしは七班でお父さんは三小隊だったんですよ。配備についたもんだから恩賜の煙草も十本ずつ貰ったんですよ。わたしはお父さんを見たら、自分は煙草は吸わないからお父さんに上げようと思ったんですけど、見当らないので、その煙草を兵隊にやりました。そのお父さんが、わたしよりも二日早く家族のところへ戻って来ていたんですよ。

もうひとり部落の人で、上原の壕で、いっしょに逃げようなあとお話してあったんですけど、この人は夜の中に逃げて、わたしは夜が明けたので逃げられなくて、一日早く逃げて来ていたんですよ。それで、その夜遅くまで話したんですけど、この人は翌日はやられてい

るんですよ。壕を出たのは、わたしは七日に来て、二十何日でしたかな、僕等が出たのは二十何日かですよ、天長節は明日か明後日という時です。いや壕から出るのもっと早く出ているんですけどね、運玉森

だから、ボケットなど体にいっぱい持っていたカンメンボーを出して、脱けることができました。しかしあわてているもんですから一つも持つことを考えなかったんですよ。

そうしたら丘の後の中腹に壕から出て行った兵隊が擲弾筒を持って待機しているんですよ。ところが隊長がやられていたんですよ。隊長といっても隊長は戦死して准尉が指揮を取っておったんですけど、壕を逃げ出す時にやられたんですよ。壕にいる時は、沖繩出の初年兵も沖繩の女もいたんですけど、いっしょに逃げ出したんですよ。女は炊事婦であったか、看護婦であったか、いっしょでしたよ。

それでわたしは、自分はひとりになるのだ、あれたちは兵隊だからと思って、そうしてわたしは、あの和宇慶の崖のあるところですね、あっちへ渡ったんですよ。そうして下へさがって行って、崖を横歩きして行ったら、北上原から来た、壕で死のうといっただ兵隊がいるんですよ。今考えたら西原の上原ですよ。今の公民館のあるあたりですよ、地形なんかから見えて。こっち来てからこの人がですね、もうあした行くからこの辺で泊って行こうというんですよ。名前も訊いたんですけどね、そうしてわたしは、ちょっと家まで行って来るから明日の何時頃にこっちで会おうと別れたんですよ。そうして今の津花波部^{つばなばたべ}に行ったんですけど、水が欲しかったので民家に入ったんですよ。そうしたら七十ぐらいのお婆さんとお爺さんが二人で、芋を煮ているところに行っていたんですよ。水を飲まして下さいといったら、お茶をいれてあるからお茶を飲みなさいといわれて、お茶を飲んだ。そうしてあつい芋も食べなさいといっただよ食べさせられた

ですね、あっちまでは早く行っているわけですよ。それであっちで親爺がやられたもんですからね、また引返して来たんですよ。

お父さんは、破片に当たって即死です。一滴も血が出なかったんですよ。頭と髀ですが、こっち(右の髀部を手で示す)がひどかったんですよ。どことが致命傷であったかはわかりませんが、一言もものを言わずに亡くなったそうです。僕等は直撃に当たったのはわからなかった。あの時、二間位離れていたんですけどね、僕等はお父さんが倒れるのはわからなかったんですよ。

運玉の壕というのはですね、入口が二つ開いていたんですよ。家族全体は入らないし、三尺ぐらいの壕で上の方も薄くてですね、こっちでやられたら大変だといって、コの字形に持っているこうと思っただんですよ。奥行きも浅いし、横穴がないんですよ。これを奥の方でむすぼうと思っただよ、僕等は、お父さんと次男もいっしょに三名で掘ることにしたんですよ。初めにお父さんが鶴嘴で掘ってすな、もう汗だらだらになっていたら、わたしが交代しようといっただよ、それじゃ交代しようといっただよ、わたしが交代しようといっただよ、それじゃ交代しようといっただよ、家族のいる壕の方へ行っただよ。わたしたちのいる壕と家族のいるところは二間ぐらいいか離れていないが、その壕は、おばあさんがいるところまでしかないで、お父さんは壕のそとにいたんですよ。そうして話しながら休んでいたんですよ。

弾はわたしたちのいる壕の前に落ちたんですよ。わたしたちの壕は上が薄いもんだから僕等は生き埋めにならないですんだんですけどね。それで天井が落ちるんですよ、わたしが弟を壕の中の方へ引き倒したわけですよ。それから二人はそこを飛び出して向かいの壕

に入りました。その壕にいた人は与那原あたりの人ではなかったかと思っただけですが、そこへ入って行って、散さん怒られてですね、僕等は。君等がそんなにして歩いているから弾がここに来るんだ、出て行け、といわれたんです。しかし聞かん振りして、しゃがんでおったですよ。そうして飛行機だとか砲弾が止んだので出て行って見たら、親爺は即死で、見たら頭とこっち（臀部）ですな、もう汚れているんですよ。その時父は三十七歳だったんです。それで家族を壕から出した。わたしたち弟とおじいさんと三名で、お父さんを壕の中に入れ、あちこちから土を集めて、入口を塞いだですよ。それでこうなつては、中心になる人はいないし島尻に行く必要はないといつて、戻ったんですよ。こっちへ引つ返して来て、今度は墓には入らないで壕に入ったわけです。そうしたら、叔父さんが帰って来たんですよ。わたしのお父さんの弟で、やはり石部隊の担架隊でしたが、この人が帰って来たんですよ、その夜おそく。

この人が話すには、敵は西原幸地（桃原部落から北北西二キロメートル）ですね。こっち来ておるから、今晚で逃げなくてはいいかんと、というんですよ。それでこの叔父さんが来たから、それでは行くといつて、また仕度をして、小さい子供等をつれて、行くことになったんですよ。二家族と叔母さん母子の二人と、みんなで十九名です。

註、喜屋武美則さん家族

父、三十七歳 運玉森で即死

母、三十九歳 ×

祖母（母の母）五十九歳 ×

つていっしょに住まねばならない関係からであろう。

この大部分が幼児である十九名の大家族が砲弾の中をこれから逃げ廻り、また長い日月の捕虜生活をするのである。

前でも言いましたが、天長節の一日か二日前にこっちを出ましてですね、小さい子供たちは担いだりもして、一晩で東風平村の富盛に行きました。道は軍の車輛などでも壊されていましたが、弾は、南風原村の津嘉山あたりまでは激しかったですが、富盛行ったら戦争のようになかったんですよ。津嘉山越えてからは、何でもなかったですね。

富盛行ったら民家に入ったんですよ、夜おそくなくなりましたから。そうしたら女の方だったが、この人が来てですね、山に上って行け、絶対にこっちにはいけない、あなたがたがこっちにいると、うちが焼かれるから出る、出ろという。おそいので、夜が明けたら山に行くから一晩だけ泊めてくれといつたんですよ、いや、おかん、といつてですね、陸軍の兵隊を連れて来て、出れというんですよ。それで仕方なく、八重瀬岳の向かいにシーサー（獅子）丘といつてあるんですよ、そこへ行った。岩の下に壕を掘ったのがあったんですよ。こっちに隠れて、こんな大勢のものは入らんから、どうせあつちこつち壕をさがさんといかんといつて、岩かげをさがして隠れたんですよ。

こっちにいた時、義勇隊といつてですよ、憲兵か何かからないが、腕章を腕に巻いて、その青年団といっしょになって、壕にいる若い者をみんな引つ張って行くんですよ。これでは見られたらいいんかといつて、僕は壕の中に隠れてですね、女たちを前の方におら

長男、美則 十八歳 ○
次男、光盛 十七歳 ○
三男、勉 三歳 ○
長女、静江 八歳 ○
次女、スエ子 一歳 ×

叔父さんの家族

祖父、七十九歳 ×
祖母、七十四歳 ×

叔父、三十四歳 ○

叔母、三十歳 ○

長男、安雄 五歳 ○

次男、晃 三歳 ○

長女、スミ子 十一歳 ○

次女、ノブ子 八歳 ○

三女ツヤ子 七か月 ×

叔母さんの家族

叔母さん 三十歳 ○

長男、助昭 六歳 ○

叔母三十歳の夫は太平洋戦争以前の支那事変で戦死。すなわち二十四、五歳以来の戦争未亡人である。

右記の×は戦争犠牲者であるが、この十九名の大家族は、桃原部落全体の戦争犠牲者から見ても、最も犠牲者が少なかった方である。祖父母が父の弟である叔父の家族になつてゐるのは、叔父は四男、父は三男、長男と次男は海外在住で、母方の祖父母があ

せて、暮していたんですよ。そうしておる時に、飛行機からガソリンですね、あれ撒かれたんですよ。

僕等もあの時に自分の壕にいたんですよ。壕の入口はクチャを松です、約一尺ぐらゐ土は被つていては松がはめられていたんですよ、この松が燃えているんですよ、ガソリンかけられているから。もう消すにも消されんですよ、天井ですから。みんな飛び出していない。しかし中には三男ですよ、あの時三歳ですよ、これが中に眠つていんですよ、わたしの兄弟の末っ子が。それと自分等のおじいさん、まだ残つておるんですよ。それでわしは三男をつれにといつて、飛び込んだわけですよ。また叔父さんも自分の親がおるから、あれも飛び込んで来たんですよ。もう、チャンチャン燃えておるんですよ、煙がいつぱいしておるんですよ、中が。これはいかん、こうしては四名が窒息するがと思つて、どうとうあの敷き物ですな、ちようど筵がそこにあつたんですよ。これを被つて一寸越えたわけですよ。そうして弟をおんぶして筵を被つてですね、わしは飛び出たんですよ。叔父さんもまたおじいさんをつれて飛び出したんですよ。そうしたらガソリン撒いた飛行機が旋回して来て、機銃掃射をするんですよ、あの山の上でチャンチャン撃たれているんですよ。しかし岩陰が沢山あるもんですから、それに隠れて怪我人はなかつたんですよ。

ガソリンは随分沢山撒かれて、一面全部火の海だったんですよ。あのガソリンタンクですね、ちようど蜂の巣みたようになっていたんですよ、低く飛んでいたのを見えたんですよ。八重瀬岳の方に落ち

おったんですがね。ガソリンタンクは随分大きいものでしたよ。ガソリンを撒いた飛行機は二機でしたが、それにつづいてあとから二機来て旋回しました。ガソリンが落ちるのはわからんですよ、それが、地面に火がついておるんです、一面に。

そうして、やつと飛行機が去ったので、みんなが壕に集まったんです。そうしたら、わたしの叔母、偶然に、ここでいっしょになった、嫁入り先の家族、叔母の夫の兄弟たちがですね、三人焼死したことがわかったんです。

叔母の舅、姑、夫の兄弟たちは、岩が二つ立っているところですね、すすきを束ねたものを立てて、それで取り巻いて、ただ上から見えないくらいですよ、枯れたすすきですから、上からガソリン撒かれて燃えたんですから逃げ道もないし、囲ってあるんですよ、あつちもこつちも。親二人は小さい子をつけて出たが、子供等三人は出てはないんですよ。それでさがしたら、子供等三名とも男か女かわからん、女は二人いたんですがね、誰が誰やらわからないぐらいい、夕方になってから三名を葬ったんですがね、そうして一か月ぐらいそこにいました。食糧なんか大変でしたよ。

あつちではですね、食事は、芋はあつたんですが、あつちの青年団が竹槍を持って、芋畑をまもって全然取らさないんですよ。いろいと頼んで見ても掘らしてはくれないんですよ。金で買いたくないんですよ(金で買へというの、金を出して、畑にある芋を、範囲をきめて売るという意味らしい)。

金を出して買っても、夜になったら誰がそれを取るかわからないんですよ。それで、いや金では買わない、といって、われわれは、

勝つというんですよ。負けた場合は、みんな死ぬんだから、芋も畑に置いてなくていいが、勝つのだから食糧は確保しておかねばならない、という考えなんです。それで掘ってある芋も金を出して買えといつてどうしてもきかないんですよ。いや、金では買わない、と頑張つて、畚に掘ったのをに入れて行こうとしたら、お婆さんでしたが、この人は、わたしたちの畚を掴まえて引っくり返すんですよ。

註、畚ぼんは、今日では全然農村からも姿を消しているが、戦前の農家では、畑仕事の物を運ぶに最も多く使用された。肥料も二つの畚に入れて棒の両方に均衡を取って担いで運び、芋、堆肥にする草などもそれで運んだ。縄で網のように四角形に編み、二か所の隅を一つの縄で程よく緒をつけ、他の二か所も同じ長さに緒をつけた。沖縄方言では、オーダーといった。男たちは、避難するに当ってほとんどがそれに荷物を入れて担いだようである。

そうしてまた掘って取ろうとしたら、取り巻かれてですね、若い者たちに、叔父さんと二人が。それで、それでどうこうだからくれといったら、若い者たちだからわかったんですが、そうしたらこのお婆さんが怒つてですよ、絶対いかんといつて、それでわたしたちは、いろいろ嘆願したんです。それでもきかない、掘った分は置いておけ、明日からは絶対掘ってはいかん、といわれてその日はとうとうそのまま帰りました。こうなつては仕方がない、といって夜ですね、食糧取りに行ったんですよ。昼は監視しているので、全然取れないんですよ。それでも約一か月ぐらいいそこにいました。

西原の自分の部落で、中城あたりから来た人たちに、戦争に追われて避難しているのだから、ただで来て来ておるから、あなたがたもくれなさいといったら、いや、この戦争は勝つというんですよ、あつちの人は。あなたがたが芋を全部掘つたら、この戦争が勝つたらこつちはどうなるか、といつてもうさかんですよ。戦争は見込みがない、どうせ負け戦だからくれなさいといつてもくれなさい。

わたしは負け戦といつたのは、自分は体験していますし、アメリカの武器見たら誰でもわかりますよ。防衛隊といつても武器は何も持たさない、ただ手榴弾二個だけ渡されただけです。防衛隊でもいくらかの人たちは銃を渡されたのもあつたとききましたが、僕等はみんな手榴弾二個ずつ持たされるという有様で、それにあの中城湾いっばいずめていたアメリカの軍艦や船、軍艦から撃ち込む艦砲、わたしたちのいた壕付近には稀にしか艦砲は落ちませんでした、が、首里へ撃ち込んでいる艦砲は大変なものでした。中城湾ばかりではありませんよ。西の海もアメリカの艦砲で空までつづいていて、艦砲をあらちらに撃ち込んでおるんです。また、南上原の壕にいた時、あの歩哨が一発ぶっぱなしたために、斥候と思つたわずか三名のアメリカ兵に迫撃砲を撃ち込まれて、あれだけの大勢の友軍が壕を飛び出して逃げたのですからね。また僕たちは十四名でしたが北上原で、それは指揮班になって、曹長が三名他府県の方がいましたが、この戦争はとてつもない、僕たちは、沖繩の土になるのだ、ともいっていましたよ。それで僕はこの戦争は勝てないとはつきりわかりましたので、言ったんですが、富盛は飛行機も飛ばないし、艦砲も来なければ、銃声も聞こえないですから、戦争は

そうしていると、こつちも飛行機が来て、機銃射撃をくり返しかえしやるのです。そのうえ大雨が降りつづけて、壕には水が溜つたりして、もうそこにもいられないといつて、そこから具志頭村の新城の前の屋取りへ行つたんです。その近くを通つた時は、爆弾の穴に人が埋められてあるんですね。むくむく動くんですね、完全には土を被せてないんですね、足が出たり、頭が出たり、アキサミヨ(驚いた時の感嘆詞)こつちをぐずぐずしてはは大変だよといつたんですが、ここは相当の犠牲が出ているなと思つたんです。あつちは何か、病院があつたなという感じがしました。艦砲の穴に入りとり埋めてありましたよ。

その時、そこに家が残つたのは瓦葺の一軒だったですよ。その屋取りは三軒か四軒ぐらいの屋敷が焼かれていたですよ。そうしてその後、は全部陣地なんですよ。草もないし、陣地を掘つたあとと擬装はしているが、すぐわかるんですよ。木も草もない、真赤ですよ。それでも、こつちは、もう家もないから、せいぜい焼夷弾を落すぐらいのものだろうと思つて、自分等の荷物をこの屋敷のガジマルの下に持つて行つたわけです。土手の方に家から出した。そうしたらちようどこに爆弾が落ちてしまつてですね、すべて吹っ飛んで、あの時から僕等は着のままになつたんです。

そうして自分のいた屋敷とは三尺ぐらい上つてですね、こつちは大きな瓦葺きの家だったんですよ。ところが床もないし、屋根はあるが囲りの戸もすべてないんですよ。大きい家ですがね、わたしはこの家に駆け込んだわけです、一直線に。そうしたらまたこの家の

庭に落ちたんです、爆弾が。そうしたもんだから後に飛び出した。この家の後は山でしたが、山を横切って反対がわに行っただけですよ。そうしたらその家は倒れて、わたしが逃げて来た道を塞いでしまったんですよ。もう少してやられるところでした。その時、わたしたちといっしょではなかったが、池田の人でひとり、あの港川から出るアワ石というのがありますね、この家の石垣はそれでやってあったんですが、それで頭をやられました。夕方飛行機が飛ばなくなつてから近くに葬ったんですがね。

爆弾が落ちた時、わたしはどことも怪我はしませんでした。叔父さんは家の中の少し前の方にいたので足に怪我をしました。怪我といつても大した怪我でもなかったんですよ、足に小さい破片が当たった程度だったんですよ。

家族は軍がいなくなった壕に入りましたが、あっちの上はニービ（前出、和仁屋の墓を掘込んだ見ても土に似ているが堅い）ではなく、ジャール（土質の名称で脆い）で、爆弾の落ちることに、壕の中は土が落ちて、つぶれるのでないかと気が持たせましたね。その日は一日中ですよ、爆弾が落ち通して、それで一晩だけそこに泊って翌日はここから出て行きました。僕等は爆弾に追い散らされてそこから逃げたんですよ。

註、この屋取りは、新城部落の東の方から南の方、具志頭部落から港川へ行くバス道路までつづいている稜線に沿っている。わたしはここ五百メートルばかり離れた同じ稜線に沿って掘立て小屋の一軒屋に、家族がひとり隠れていて、最後に捕虜になつて、そこからこの屋取りに沿う道を通って新城の部落の東を右折

は、人間の腐臭が酷かった。道のまん中に友軍の靴が片足だけあったが、米兵は、それを土のりもり上っている道端へ足でなおして、上から踏みつけて土の中に突っ込んでからやはり穿いている靴で土を被せた。その態度には、戦死した靴の主への同情がこもつた心づかいを察しせしめた。女が肩から掛けて持つ救急袋が道端にあったし、おしろいや化粧クリームの容器もあった。死んだ人が露出しているのは見なかったが、埋められている死人は余程多かったのではなかったかとあまりにひどい腐臭から推察された、ということである。

また、佐敷村の新里部落に收容されていた時、新城部落の砲撃から逃がれて来た人が、新城の激しさを語って、新城部落はほとんどやられて、人間が生き残っていないだろう。あっちには兵隊は、いてもごく僅かで、新城部落の住民と避難民ばかりがやられた、と話していたとのことである。ふたたび喜屋武さんの話に戻そう。

それで今から島尻に行くことはできんから、知念・玉城に下ろうといつてですね、真昼ですよ、飛行機も飛んでいたが、民間人だといつてでしょうね、何もしなかったんですよ。そうして富里・当山といつてあるんですがね、あっちへ行っただけですよ。あっち行ったら区長さんか何か知らんですがね、全部受け容れてすな、野菜でも芋でも沢山あるから、どこでもいいから取りなさいといつて、みんなを案内してですね、畑に行つて芋も掘って取って、野菜も取って、また相当に豊富にあったんですよ。それで、こんないいところもある、こつちで暮さうねと話合つて三日ぐらいいいたんですよ、

して歩いている。その関係でこの屋取りを十二、三年このかた五、六度訪ねている。今年六月二十三日の慰霊の日と七月十九日と二度訪ね、写真も撮った。わたしの家族が隠れていた所はオウハマボウで囲われて、当時の面影を止めている一軒屋跡を、近く取り去つて畑にするのと聞いたので、それを撮って置くために、七月十九日もつづけて訪ね、ついでにこの屋取りへ例によつて行ったのである。

喜屋武さんが言っている瓦葺の大きな家というのは、現在も一軒だけ残っている。上下二棟の大きい亜鉛葺の家の建つ屋敷にあつたに違いないと思う。通りから垂直に入る横道に沿う広い屋敷で、多分この一帯の土地持ちらしく、したがってただ一軒だけ定住しているのだろうと察しられる。その東がわは、稜線の縁にあたる灌木の藪が、小高い丘になったり、巖をあちこちに露出させていたり、稜線の崖までは可成りの幅を持っている。一軒屋の広い屋敷を通り越して間もなく左手に、道に沿って丘がある。ここが喜屋武さんの言われる陣地のあつたところだと思ふ。

わたしの家族が米兵に連れられてここを通つたのは、六月十日前後というので、喜屋武さんがここにいたのより二十日ほど後のようであるが、こつち一帯の様相は、喜屋武さんのいた時とは全然異なつていたようで、人間の建造物は何一つ見られない。見える限りが耕したように草や木も全くない。赤土の肌をむき出して、屋敷跡と畑の差別が全然わからなかった。道も耕された畑に土を左右にかけかけて作つたようになっていた。歩いていると臭気が鼻を吐くが、この屋取りから新城部落のあつたあたり

あつちには。そうしたら、アメリカが、糸敷（富里の北方一キロ半の直線距離、中間に屋嘉部部落がある）ですな、あつちの台上に来てパンパン機関銃でやっておるんですよ。これは、こつちにいることはできんといつてですな、昼、夜ではないんですよ、また島尻へ下つたんですよ。港川は通らないで内の方ですな、前川ガラガラを通過して、新城の本部落へ来て、そこでは真昼ですから、ちよつと休憩して、具志頭に行きましたよ。もうあの時から、あつち行くのもこつち行くのもおるし、あつちがいい、こつちがいいといつて、思い思いの行動ですよ。帰つて来るのもおるし行くのもおる。僕等は、逆だったんですよ。僕等は追われて来たんだから、当然あつちだといつて、あつちが広いからどうせあつちでなければいかんと思つた。具志頭村の坂名城を通過して、真直ぐ行って真栄平ですな、本道を通つたが、近道を通つたんですかわからんですが、真栄平に行つたんですよ。あつちは家は焼かれていたんですよ。そうして焼けたところに人が焼死しているところもあつたですよ。それで家もないからつぎの部落に移ろうと新垣に行つたわけですよ。新垣も家が焼かれていたが、非常に上等の家が残っていたので、その家のアシヤゲに入つたですね。新垣には兵隊もいたですよ。新垣では、僕等はもう食べる物が無くて、兵隊のトラックから落してある米を拾つて来た。黄色く色がついた玄米でしたが、これを炊いたらに

がくてどうしても食べられない、捨てたんですよ、腹はすいてい

るが。火薬といつしよに置いてそれが黄色くなつていたんですよ。新垣には四日ぐらいいいたんですよ、そうしたら来るんですよ弾が、四方八方から。その時この陣地にわたしと同級生が防衛隊でい

たんですよ。これから煙草を貰った。わたしは煙草は吸わないが、あなたがたはおじいさんがいるから配給貰ったんだといってた。この人は、わたしたちが、新垣から出ようとする時にやられたですよ。新垣は砲弾の雨だったですよ。昼、夜といつてないですよ、あつちは。そこに四日ぐらいいいたが、デヤンデヤン、しょっちゅう休みなくやるんですよ。それで、はあもうこつちには危険だといって、移動したんですが、もう島尻といったら壕といつては無いんです。掘ろうと思っても道具が無いし、富盛まではあったが、あれからは、人のうちとか木のかげにいました。

そうして米須部落を通って今のひめゆりの塔の下の伊原という部落にきた。新垣から夜に出たのだから、遅くなっている。ああ、もうここにおれといった。僕等は喜屋武に行くつもりであつたんですよ。もうそこに入れて、うちがあつたんですよそこから入って、こつちは茅葺なんですよ、上等な。破片ぐらいいは避けられるからといって。床はなくて床持ちだけあるんですよ(与那城ツルさんの記録にも出る)。そうして台所に、上座はどこの人かわからんが、僕等が行ってから全滅やつたんですよ、直撃受けて。

僕等は先で、この人たち(与那城ツルさんたち)は後になつていきました。もうあつちでは食糧はないですよ。井戸なんかも部落で一か所か二か所、部落の裏の山手にあつたんですよ。またもうアメリカーは食糧がないとわかっておるから、甘蔗畑もぢやんぢやん焼いてしまつたんですよ。また井戸なんかも飛行機上つたらもう、水汲みに行っているのをこれ狙ってやるんですよ。それで人が井戸に落ちたりして、それを引き上げて、それでもどうしても水は汲ん

どりは石垣のかげにいてそこでやられたからそのまま石で囲つてそこに葬つた。(ここで与那城さんと二人で、死んだ人びとの屋号と名前をたしかめる)六名死んだ。隣りは屋敷なんですがね、こつちは畑だつたんですよ。ちようど床下に当っているんですよ。僕等は全部並べて埋めたんですがね(与那城さん発言「ほかの人も大勢いたんですよその家に。子供がね、父親が死んで迷っていた」と、上座に相当の人がいたんですよ。知らない人が沢山死にましたよ。(与那城さん発言「小さい子がね、山の中をさまよっているのもおりましたよ」と)「よちよち歩く子が人のところへ来てですね、何でも口にするのがいたんですが、誰もこの時は助けようとするものがない。また自分もせいっぱい、食糧も少ない。芋をあさって来て兵隊の飯盒で炊いても、兵隊に見られたらそのまま持つて行かれるんですよ。この飯盒は兵隊のものだといって取るんですが、これは僕等がこつちで貰つてあるからとぐつてもきかんですよ。これは軍のものだから、これを与える兵隊はいないとか、おばあさんなんかは言葉も通じないから、力ずくで取つて逃げて行くんです。鉄砲も何も持つてないんですよ。友軍の兵隊といつても、避難民の食糧を時間を見はからつて取りに来るんですよ。

そうしてそこを移動することにして、おじいさんを叔父さんが負んぶしようとしたら「いや、わたしはもう負んぶされない」というのを、叔父さんが背中に負ぶつて、ちようど帯がかかえるところですよ、足が、痛いといつてですね、今のひめゆりの塔のところ通る時でしたね(与那城さんに呼びかける)、兵隊が大勢やられていた

で飲まねばいかん。それであつちで、幸助というのとわしと二人、食糧がないから甘蔗を取つて来ようなといった。

あの時は焼け残りがあつたですよ、甘蔗畑が。部落の前は平野でしたから、そこに行つて甘蔗を取ろうとする時から、もう自分の頭の上からすな、トンボが飛んでおるんですよ、赤い色の。もうまた部落はこれは危いなあといつて、どうせ僕等は動けないから二人とも溝にすね、狭いところに入つていたですよ。それから部落へ行つて見たら、自分のおじいさんもここ(右股)「やられておるんですよ(この時与那城ツルさんが「木の下でね」、と言葉をはさむ)。海上からの機関砲ですよ。この時には、僕等のおじいさんも怪我を負つて、またこの方のいとこの嫁も亡くなった(また与那城さん発言、「大勢亡くなつておりますよ、ハマの奥さんの親も兄弟も」と)。お父さんが死んだのは、あの時はですね、子供の世話をみて、御飯炊いてやるといって、怪我した子供より先に亡くなつておるんですよ、おやじはお父さんは。あの方の(与那城さん)「おやじですよ、鉄帽(鉄兜)被つて(また与那城さん発言「ヨナ木の下でね」と)うちの後のところですよ、みんなが隠れておるのに「わしには鉄帽被つておるから当らん」といって。鉄帽といつてもまともに頭やられておる。そうしてそこのおばさんも「助けてくれ」といって、もう僕等もどうせ見込みない、といつてやつたんですよ、葬る時には僕等がやっているんですよ。あの時に部落の人が、親子、この方の(与那城さんの従弟の妻のこと)、五名かな、六名か。(与那城さん発言。「前仲のナバー」と)もう並べたんですよ、隣の屋敷あいていましたから。喜納三男のウサーおばさんひ

です。まだ生きていて「水くれ」というのもいた。大勢やられてほとんど死んでいたが、何か電波でもやられたたではないかと思ひました。そうして大渡浜にきた。もう壕も無いですよ。もう隠れるところは無いんですよ。夜出たつた時は、夜が明けてしまつた。隠れるところもないし、阿檀の下にみんなは入つた。わたしは壕をさがしに上の方の上つたところをもうじやんじやんやられて、一日中身動きもならん一人だつたんですよ。それで戻つて行くことが出来ないんですよ。そして五時ですか、弾が止んでから行つたら、みんな見えない。どこへ行つたかなと思ひながら捜したら、ずつと阿檀の中に入つておつたんですよ。その時は最後の攻撃でしたかな、朝から晩までやられておるんですよ、壕も何もないところですよ。ちようど大渡浜の今木麻黄のあるところで、あの戦前も木麻黄はあつたんですよ。僕はちよつと高いところにおつたんですが、この迫撃砲というものは、斜めに来てちよつと高いものは、すぐ前に落ちるんですよ。わたしは一番高いところでした。黄燐弾というんですかね、落ちたらすぐ燃えるもの、近くに落ちると砂で埋めて消したんですが、海岸の岩のところにもバンバン落ちたんですよ。その日は朝からみんな、何んにも食べていません。水一滴も飲んではないんですよ。

註、喜屋武さんたちはその夜、摩文仁部落へ行つて、翌日の昼、摩文仁からギーザバタの方へ向かつて行つて、あそこで米軍に捕われている。与那城ツルさんといつしよであるが、大渡の阿檀の中で祖父は伊原での怪我のために亡くなられる。

捕虜生活は与那城さんとほとんど同じだが、若い少年ながら、一時的に、佐敷の米軍の金網の中に入れられたり、那覇の古波蔵で十日ほど作業させられたりするが、やはり与那原からLSTで久志の辺野古崎へつれられて、食糧難の久志で捕虜生活をする。

せつかく戦争では助かったお母さんおばあさんがマラリアで亡くなり末っ子の妹も栄養失調で亡くなり、十七歳の喜屋武さんは、結局戦争のために祖父母、父母を失い、十七歳で弟妹を養育することになる。叔父さんの方も、義叔母さんのお母さんや、子供たちを食糧難とマラリアで亡くする。

宇池田(西原村)

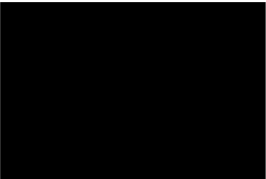
宮城 聡

時 一九六九年十一月十六日

場所 宇久田朝秀区長宅

出席者

氏名	現住所
宇久田朝秀 <small>うくだ ちゆうしゆう</small>	
伊良皆宜一 <small>いらみな しいち</small>	
島袋カミ <small>しまぶく しみ</small>	
野国昌象 <small>のくに しょうしょう</small>	
宇久田春子 <small>うくだ はるこ</small>	
喜屋武ウシ <small>きやでん うし</small>	
田場ウシ <small>たば うち</small>	



解説

宇池田は、ずい分広い地域を占めていて、四方が起伏する丘に囲まれているが、その盆地が雄大に見えるので、狭い盆地に見るせまこましさを感じられないのみか、人の心をのびのびとさせる。おしなべて見ると、広い平野のようである。これまで時折り出て来るヘンサの底という場所も、池田の区域内になっっているらしい。そういう地形だから、人家はどこどこに散在している。はじめて行っ

た人には、その雄大さを意外に感じるであろう。わたしもはじめて行ったのであるが、中城村南上原と共に、印象の深い渺渺たる風景が縹渺たる詩感を湧かす好ましいところである。

伊良皆宜一さんは、当時三十六歳の男盛りで、共通語が達者な、時には新しい外来語も遣われるくらいで、お話のまま筆写ができた。宇久田春子さんも共通語だったので、お話のまま原稿にできた。

しかし他の四人の方は、全部、沖縄方言であった。沖縄方言といっても、御出席の方がたは、首里から移住された往時のいわゆる土族、また貴族もいられるらしく、ヤチメー(貴族の兄さんの意)という言葉も出た。

これ等の方に対しては、われわれのたどたどしい方言ではわからないように、宇久田区長に通訳して頂いた。したがって、宇久田さんが話の引き出し役になって、年少者の宇久田さんは、区長の要職にあるが、出席者の方がたに敬語を遣って訊かれた。それによって話される年長者の方がたは、目下への話し方、敬語は全然まじらない、沖縄における特に土族社会で顕著だった長幼の序を現わした語法で終始した。

この四人の方がたの記録の文体は、そのまま共通語に訳した結果である。正確に訳するために努力はしたつもりだが、ダー、ナランセーなどのダーが、「さあ」よりも、もっとユニークの意味を持っていることはわかっているが、それ以上適訳が考えられなかった。ナランセーも、「できないだろう」あるいは「できないよ」よりもっと変った意味、感じが含まれているとわかるが、そういうのを